

三重県飯南郡飯南町粥見

# 粥見井尻遺跡発掘調査報告

附編 粥見小林遺跡発掘調査報告

1997. 3

三重県埋蔵文化財センター



鳥岳より遺跡を望む



土偶1



土偶2

## 序

飯南町は、三重県の中央部に位置しており、橿田川の中流域に開けた場所です。特に橿田川が蛇行し、段丘が東に広く張り出す弼見地区は、縄文時代から江戸時代の遺跡が所在します。

今回報告いたします弼見井尻遺跡と弼見小林遺跡の概要は、国道368号のバイパス工事に先だって発掘調査されたもので、当町内で実施された調査としては5回目になります。調査の結果、日本列島における定住のルーツを考える格好の遺構や遺物が確認されました。

草創期の竪穴構造が判明した類例は全国でも鹿児島県などで3例ほどが知られているに過ぎませんが、この弼見井尻遺跡からは、縄文時代草創期の竪穴住居が4棟検出されました。また、これらは近接あるいは重複していることから、一定期間の居住が窺われます。

そして何より、この竪穴住居から乳橙色をした土製品が出土しました。それが、日本列島最古の土偶でした。関係者の驚きとともに、全国の考古学者や地元住民の関心を大いに集めました。このような日本を代表する文化財が、私たちの地域の祖先の歴史を紐解く重要な資料として後世に受け継がれていくことを期待してやみません。

最後に発掘調査および資料整理にご協力いただきました飯南町教育委員会および地元のみなさまに厚くお礼申し上げますとともに、今後とも地域の文化財保護のために更なるご理解とご協力を頂きますようお願いいたします。

平成9年3月

三重県埋蔵文化財センター  
所長 奥村 敏夫

## 例 言

1. 本書は、三重県飯南郡飯南町粥見字井尻・小林に所在する粥見井尻（かゆみいじり）遺跡の発掘調査報告、及び粥見小林（かゆみこばやし）遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は下記の体制で実施した。  
調査主体 三重県埋蔵文化財センター  
調査担当 現場調査 調査第一課 中川 明・西出 孝  
臨時技術補助員 山田康博  
研 修 員 前川明男
3. 本書の執筆と写真撮影は中川明、前川明男が、編集は中川明が行なった。  
なお、文責は目次と文末に表記した。
4. 調査面積は、粥見井尻遺跡が1,950㎡、粥見小林遺跡は600㎡である。
5. 現場調査期間は、平成8年5月7日から平成8年11月21日である。
6. 本書で示す方位は、真北を用いた。  
なお、国土座標第Ⅵ系の座標北は0度18分西偏しており、磁北は6度20分西偏している（平成4年、国土地理院）。
7. 本書では、下記の遺構表示略記号を用いた。  
SH：堅穴住居 SB：掘立柱建物 SD：溝、自然流路 SK：土坑  
Pit：小穴 TP：下層確認テストピット
8. 発掘調査及び本書の作成に際しては、下記の方々にご指導・ご協力をいただいた（敬称略）。  
記して謝意を表します。  
  
青木哲哉、大塚達朗、岡村道雄、奥 義次、大下 明、角張淳一、久保勝正、  
谷口康浩、新田 剛、新田智子、原田昌幸
9. 本書が扱う発掘調査は、平成8年度国道368号国補道路特殊改良事業に先立つものである。
10. 発掘調査の経費は三重県土木部道路建設課が負担した。
11. 本書が扱う発掘調査の資料や出土遺物は、当三重県埋蔵文化財センターが保管している。

## 本文目次

I 前 言 .....	1
II 位置と環境 .....	3
III 層序と遺構 .....	5
IV 遺 物 .....	15
V 結 語 .....	17
附編 粥見小林遺跡発掘調査報告 .....	31

## 挿 図 目 次

第1図 遺跡位置図 .....	2
第2図 調査区配置図 .....	4
第3図 遺跡周辺の地層 .....	6
第4図 遺構平面図 .....	7
第5図 土層断面図 (1) .....	8
第6図 土層断面図 (2) .....	9
第7図 下層確認範囲図 .....	10
第8図 SH 4 実測図 .....	11
第9図 SH 8・24 実測図 .....	12
第10図 SH 10 実測図 .....	13
第11図 SK 5・12・14・23 実測図 .....	14
第12図 竪穴住居出土遺物の器種組成 .....	18
第13図 出土遺物実測図 (1) .....	19
第14図 出土遺物実測図 (2) .....	20
第15図 出土遺物実測図 (3) .....	21
第16図 出土遺物実測図 (4) .....	22
第17図 出土遺物実測図 (5) .....	23
第18図 土層断面図 .....	32
第19図 遺構平面図 .....	32
第20図 SB 10~13 平面図・断面図・SD 1 土層断面図 .....	33
第21図 出土遺物実測図 (6) .....	35

## 表 目 次

第1表 遺構一覧表 (1) .....	11
第2表 遺構一覧表 (2) .....	13
第3表 出土遺物観察表 (1) .....	24
第4表 出土遺物観察表 (2) .....	25
第5表 出土遺物観察表 (3) .....	26

## 写真図版目次

PL 1 調査区全景 SH 4・8・24・10	PL 4 調査区全景 SB 11~13、SD 1
PL 2 土偶 1 縄文土器・尖頭器	PL 5 出土遺物
PL 3 矢柄研磨器・石鏃	

# I 前 言

## 1 調査に至る経緯

三重県教育委員会では、国及び県に関わる各種の公共事業に関して、関係部局の事業計画を照会し、事業予定地内の文化財保護に努めている。

こうしたなかで、三重県土木部道路建設課から、国道368号粥見BP国補道路特殊改良工事計画の回答があり、三重県埋蔵文化財センターが事業地内の遺跡分布調査を実施した。その結果、この事業地内には北出遺跡が分布していることが明白となった。当センターでは、さらに詳細な遺跡の把握をするため、平成7年10月に試掘調査を実施した。その結果、溝畑遺跡に隣接する北出遺跡A地点では縄文時代の石器のほか中世の遺構や遺物では土師器、陶器を確認した。この取扱いについては、その保護に努めるよう松阪地方県民局と当センターの間で協議を重ねたが、現状保存が困難な状態となったため、やむなく発掘調査を実施し、記録保存をはかることとなった。なお、遺構、遺物を確認した地点は行政区域名称（小字名）が「井尻」と「小林」に該当したため、それぞれの遺跡名を改変し、北を粥見井尻遺跡、南を粥見小林遺跡とした。

現地での本調査は、県土木部の執行委任を受けて、前者が平成8年5月7日に、後者が同年10月8日に着手し、両者ともに同年11月21日に終了した。調査面積は粥見井尻遺跡が1,950㎡、粥見小林遺跡が600㎡である。また、地元調整については飯南町教育委員会の協力を得た。

## 2 調査の方法

### (1) 粥見井尻遺跡

当遺跡の調査区は、便宜上、道路本線部分をA地区、隣接する町道幅部分等をB地区とした。さらに、A地区は道路予定地のセンターライン(No.55-53)を基軸にして、4m方格の小地区を設定し、西から東へはアルファベットのA~Jを、北から南へは数字の1~16を与えた。この組み合わせでグリッド名を呼称した。

なお、北半部で集中的に剥片や石礫を採集していたため、その箇所のみ詳細な遺物の出土状況を観察

するためグリッドをさらに4分割した。そして、それらには小文字のアルファベットa~dを与えた。

表土掘削は、A・B地区ともに遺構面に影響を及ぼさない程度に重機を用いて実施した。遺物包含層及び遺構掘削、下層（黄褐色砂礫層）の掘削、TPの掘削はすべて移植ゴテ等を用い、人力で行った。

縄文時代の遺構や微細な石器類の取り上げには、遺構の特徴を考察するための情報を記録する「石器取上表」を作成し、随時記録した。表には番号・器種・出土地点、EW（横）・SN（縦）・高さ（深さ）・土層（土色）の項目を設けた。

図面については、全体の遺構平面図・地形測量図を縮尺1/100で、個別の遺構平面図・断面図を1/20で作成した。

記録写真撮影は遺構や遺物を中判カメラ(6×9)、35mmカメラを併用し、実施した。

なお、同年11月に航空測量を(株)イビソクに委託し、実施した。又、遺構の土壌分析を名古屋大学に依頼した。

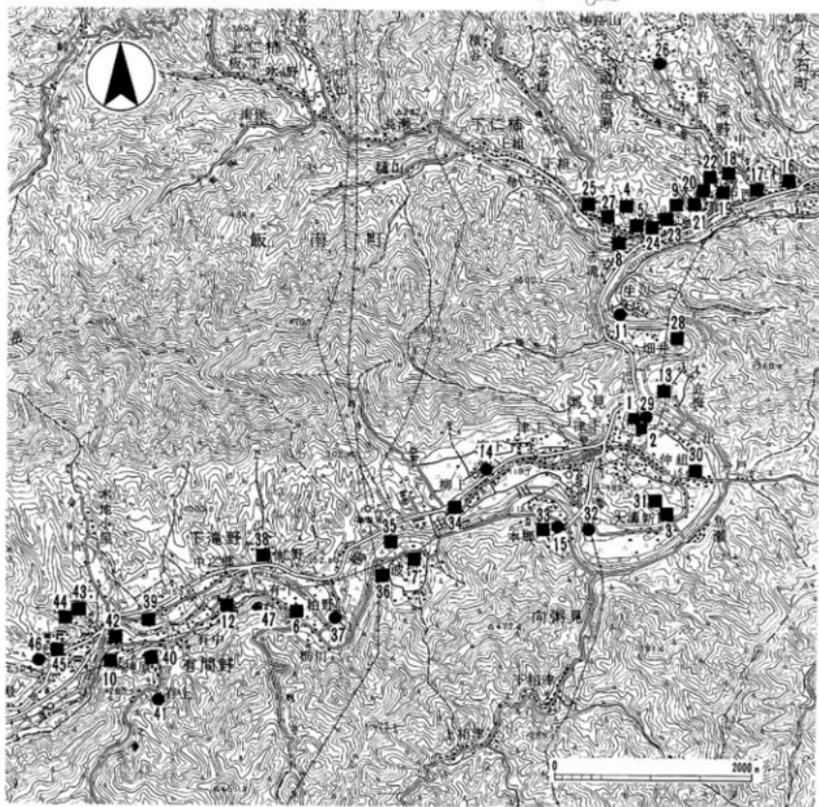
### (2) 粥見小林遺跡

調査区の設定は基本的に井尻遺跡に合せた。4m×4mメッシュのグリッドに対し、西から東へはアルファベットのA~Dを、北から南に向かっては数字の2~13を与え、それらの組み合わせで呼称した。

掘削方法も表土以下包含層までを重機で行い、遺構面までを人力で行った。

なお、調査中の図面作成、記録写真の撮影は粥見井尻遺跡の調査手順や方法に従って実施した。

両遺跡の現地調査にあたっては地元、飯南町の方々に協力していただいた。



1. 瀬見井尻 2. 瀬見小林 3. 足ヶ瀬 4. フイ谷 5. 上ノ垣外 6. 下中切 7. 波留 8. 百合 9. 殿垣内  
 10. 上山下 11. 生辺 12. 宮野 13. 立梅 14. 登之庭 15. 奈可切 16. 東沖 17. 西沖 18. 磯田畑 19. 大西  
 20. 宮ノ西 21. 境ダ 22. 留谷 23. チカネ東 24. チカネ西 25. 森ノ東 26. 広 27. 横谷道ノ上 28. ニゴリス  
 29. 川ノ上 30. 溝畑 31. 上ヶ所 32. 二つ岩 33. 中山 34. 奥新田 35. 北波留 36. 川ノ上 37. 丸山  
 38. 蛇野 39. 椏肥野 40. 上ノ原 41. 小山 42. 上川ノ上 43. 長野 44. 奥ノ広 45. 登山 46. 宮ノ上 47. 滝野城  
 図中の■はササカイト出土遺跡

第1図 遺跡位置図 (1:50,000) 「この地図は国土地理院発行の1:50,000地形図(丹生)を掲載したものである」

## II 位置と環境

### 1 位置と地形

粥見井尻遺跡(1)・粥見小林遺跡(2)の所在する飯南町は、三重県の中央部やや南西側に位置する。遺跡は、梅田川が広く東に蛇行する西側河岸段丘上に立地し、標高は約105m~107mの間に属する。

当地域を含む中南勢地域の地質は、中央構造線によって二分されている。北側(内帯)にあたる領家帯は花崗岩で形成されており、両遺跡の北側の丘陵には片麻花崗岩が露頭している箇所がある。南側(外帯)には三波川帯が形成されており、石墨千枚岩の発達が目立つ。これを基盤とする上層部に両遺跡は立地している。

この中央構造線にそって東流する佛田川の沿岸でも特に粥見地区の平野部は幅狭く、東西に帯状に連なり、河岸段丘の形成は著しい。粥見井尻遺跡付近では河岸段丘面が形成される以前の遺構基盤層(黄褐色粘質土層)は西岸部では一部露出しているが、東側にはこの基盤層が随分厚く堆積している。

また、粥見小林遺跡の基盤層(黄褐色砂質土層)は、粥見井尻遺跡の基盤層の形成後に堆積したものである。

### 2 歴史的環境

#### (1) 縄文時代

当遺跡の周辺には多くの遺跡が知られている。以下、時代順に概観してみたい。

旧石器時代から縄文時代草創期の遺跡は、国道166号線沿いに分布している。北から足ヶ瀬遺跡(3)上ノ垣外遺跡(5)、下中切遺跡(6)等が知られている。下中切遺跡では有舌尖頭器が表採されている。これは梅田川流域における最奥部の例であり、注目される。

縄文時代早期に入ると、足ヶ瀬遺跡からは、大鼻式と大川式の押型土器が、また百合遺跡(8)では黄島式の押型土器が確認されている。早期末~晩期になると飯南町内の遺跡からはまとまった資料が得られていない。

奈可切遺跡(15)の西方の中山遺跡(33)からは後期ころの土器や石鏃・搔器が出土しているが、明

確な遺構は確認されていない。波留遺跡(7)では、円形プランの竪穴住居が1基確認されている。

このように、この地域では早くから人々の生活が営まれていたことが伺えるが、これ以後の時代様相については空白部分が多い。しかしながら、近年の町内で実施された発掘調査では、貴重な資料が確認されている。

#### (2) 鎌倉時代~

平成6年の溝畑遺跡(30)の発掘調査では集落跡は確認できなかったものの、土坑や溝や枕列跡を検出した。遺構からは13~16世紀の土師器や陶器、青磁、白磁等の遺物が多数出土した。土坑出土の資料は伊勢神宮勢力下の「粥見御園」の関連性を示唆したものと言える。また、南方の奈可切遺跡(15)では室町時代中期の掘立柱建物3棟と溝5条が確認されており、集落の広がりも裏付けられてきた。近隣では立梅遺跡(13)がある。確認された掘立柱建物3棟のうち1棟から南東隅土坑も検出されている。城館は滝野城(47)が知られており、文献にも詳しい。『源平盛衰記』の伊勢滝野合戦の条に記載されている。これ以後近世に至るまでの情勢は発掘調査例も少ないために不明な点が多い。今後の調査例に委ねたい。

江戸時代には現在の国道166号線が和歌山街道として紀州藩の公道的役割を果たし、人々の往来や物資の輸送をも盛んにした。大和方面から繋がる伊勢本街道は粥見神社で伊勢別街道(現国道368号線)に分歧しており、宿駅も置かれたことで粥見は繁栄した。文政期には西村彦左衛門により、「立梅用水」の大治水事業も行われ、地元の産業構造にも変革が遂げられた。以後の社会情勢や歴史的事象については町史に詳しい記述があるので参照されたい。

(中川 明)

#### (註)

① 筒井正明 「溝畑遺跡発掘調査報告」(三重県埋蔵文化財センター、1996)

② 西出 孝 「奈可切遺跡発掘調査報告」(三重県埋蔵文化財センター、1996)

(参考文献)

① 「三重県の地名」(『日本歴史地理大系24』平凡社1983)

② 奥 義次 「第1章 源朝」(『飯南町史』飯南町役場1984年)

③ 磯部 克 「鍋田川中流域の地質」(『自然の歴史』コロサ社1991)

④ 磯部 克他 「粥見付近の地質」(『三重県の地質図』三重県高等学校地理科部会1974年)を引用し、記述した。



第2図 調査区配置図 (1:2,000)

### Ⅲ 層序と遺構

#### 1 地形と層序

今回の調査区は柳田川西岸に形成された河岸段丘の縁辺部に位置し、北東側の緩斜面に広がる。調査区の北端及び南端には東西方向の細い谷が走り、段丘下の現況の水田に延びている。この水田は北へ流れた柳田川の旧河道の一部と考えられる。さらに、この旧河道から約300m東方には、現在の柳田川が流れている。

地区別の基本的な層序は、以下のとおりである（第3図）。

A地区は、上から順に第1層（耕作土）、第2層（暗茶褐色土）、第3層（灰暗褐色土）、第4層（黄褐色粘質土）となっている。第4層では、縄文時代の遺構を検出した。さらに、その下に第5層（黄褐色砂質土）が堆積している。第6層は、礫層で、調査区西半部においては第4層（黄褐色粘質土）上に露出していた。この礫層にはチャートの転石が混ざっており、第5層からは、縄文時代草創期以前の石器素材が採集されている。

縄文時代の主な遺構は、上記の第4層上面で検出した。但し10列グリッド以南では、第4・5層の堆積が不安定であり、遺構の検出は容易ではなかった。第5層（下層と称す）は、上層の漸移層と認識したが、これは調査区西半の一部に限られた。ここから他では認められなかった大型チャート片、頁岩が集中的に出土したため、遺物の出土状況と時期差の点を考慮して、下層調査も行った。

B地区は、第1層（耕作土）、第2層（灰暗褐色土）、第3層（黄褐色粘質土）が順に堆積し、第3層は既述の第4層に相当する。西壁ではA地区から連続するとみられる砂礫層が標高の高いレベルで認められた。

#### 2 遺構

本調査によって確認した主な遺構は縄文時代草創期の竪穴住居が4棟と同時代の土坑が16基である。既述したが、これらは、第4層（黄褐色粘質土）上で検出した遺構群で、特に住居跡が、河道西側に広がる河岸段丘の縁辺部に建てられているのが特徴的

である。

また、調査区の南端では室町～江戸時代初頭の獨立柱建物1棟を確認した。

なお、遺構全体の検出地点はグリッド表示し、順に記述する。

#### 縄文時代の遺構

##### (1) 竪穴住居

SH4（第8図） F～G4～5グリッドで検出した。直径が5.5m×5.4mの略円形プランである。現存最深は0.55mで、床面は船底状を呈する。北西端からやや内側で小穴を2基確認した。いずれも直径10cm程の円形である。北側の直径50cmの範囲で焼土ブロックの混入した箇所が認められたが、炉は確認していない。遺物は埋土の褐色土中から無文土器、矢柄研磨器(23・24)、無基石鏃(28～32・45～61)、チャート剥片、母岩等が出土した。

SH8（第9図） SH4からやや南に下がったE～G・5～7グリッドで検出した。6.0m×5.5mでやや楕円形さみのプランである。深さは現存最深で0.55mである。床面はSH4同様に緩くカーブする船底状である。北端近くで垂木穴と思われる小穴2基を確認した。北半分の埋土中にやや大きめの粒状朱色ブロックが認められたが、炉址は確認できなかった。一方、南半分では褐色土中から微量であるが炭化物も確認できた。遺構東側の埋土（褐色土）中から土偶(1)が1個体出土した。他に細線縁文(3)や爪形文(4)、無文土器(15)等が出土した。これらから各遺物は草創期に属するとみられる。

なお、西側ではSH24との重複関係が認められた。SH24（第9図） 既述したが、SH8の西側で重なり、埋没後に掘り窪められた遺構である。F6グリッドで検出した。4.1m×3.8mの略円形を呈している。深さは0.65mが現存の最深で、既述の遺構に比較すると法面から床面への傾斜は急で、深く傾斜する播鉢状を呈する。炉は確認できなかった。検出時の埋土は灰暗褐色土で他とは土質が違っていた。SH8と同様に、床面で垂木穴と思われる小穴を2基確認した。この小穴からは、小剥片が検出された。

竪穴住居の埋土(暗褐色土)からは、無文(11・15を除く9~19)、条痕状文(11)、縄文瓦痕(21)土器が集的に出土した。細片であるが隆縁文土器も1点含まれる。時代的にはやはり草創期と考えられる。

SH 10 (第10図) E 8~9グリッドで検出した。直径4.5mで、ほぼ円形プランの住居跡である。床面は船底状で、深さは最深で0.25mを残す。西側で垂木穴らしい小穴を2基確認した。炉は認められない。中央の埋土(褐色土)から土偶頸部(2)と矢柄研磨器(26)が出土した。さらに床面に近い下層部(淡褐色土)からは石器を含む剥片が出土しているが、上記のSH 4・8・24と比較して極めて少量であった。

## (2) 土坑

すべて黄褐色土上から掘られていた遺構である。計16基を確認した。ほとんどが2mに満たない円形土坑で、わずかにくぼむ程度の浅い土坑である。特徴的な5基を以下記述し、他は後に掲げる一覧表に整理した。

SK 5 (第11図) SH 4の南西寄り、F・G 3グリッドで検出した。2.2m×1.9mで、深さは現存最深で0.3mの小規模な土坑である。検出時はSH 4に伴う遺構であると予想したが、単独の遺構として記述する。褐色土の単一層からユズドフレイク、削器が少量出土した。

SK 7 E 4グリッドで検出した。SH 4の北西端部で接している。平面形は0.9m×0.7mと重複した

楕円で、深さは0.1mを測る。検出時はSH 4と重複した煙道付炉穴と考えたが、最終的に単独の小土坑と判断した。少量の剥片が出土しているが、詳細な時期は不明である。

SK 12 (第11図) 竪穴住居群の南側緩斜面をやや下ったE 11グリッドで検出した。直径2mほどの不定形な土坑である。深さは現存最深で0.35mである。底近くになると、礫が基盤にめり込む形で露出していた。埋土は褐色系で、ここからは土器片をはじめ、石鱗片、剥片、石英母岩が確認された。

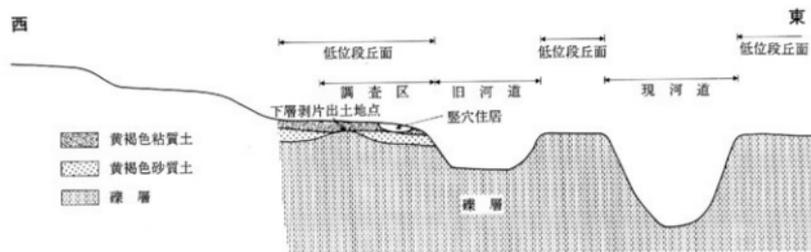
SK 14 (第11図) F~G・7~8グリッドで検出した。平面形は1.9m×1.5mとやや不定形で、深さは0.3mを測る。埋土からは無文土器片、剥片、母岩、礫が出土した。遺構掘削前に南北方向のトレンチ調査を実施したため、一部を削平してしまった。その時点でも剥片石器は少量含まれていた。

SK 19 B 5グリッドで検出した。直径1mのほぼ円形を呈し、深さは0.2mを測る。埋土から無文土器片が2点とチャート剥片が出土した。

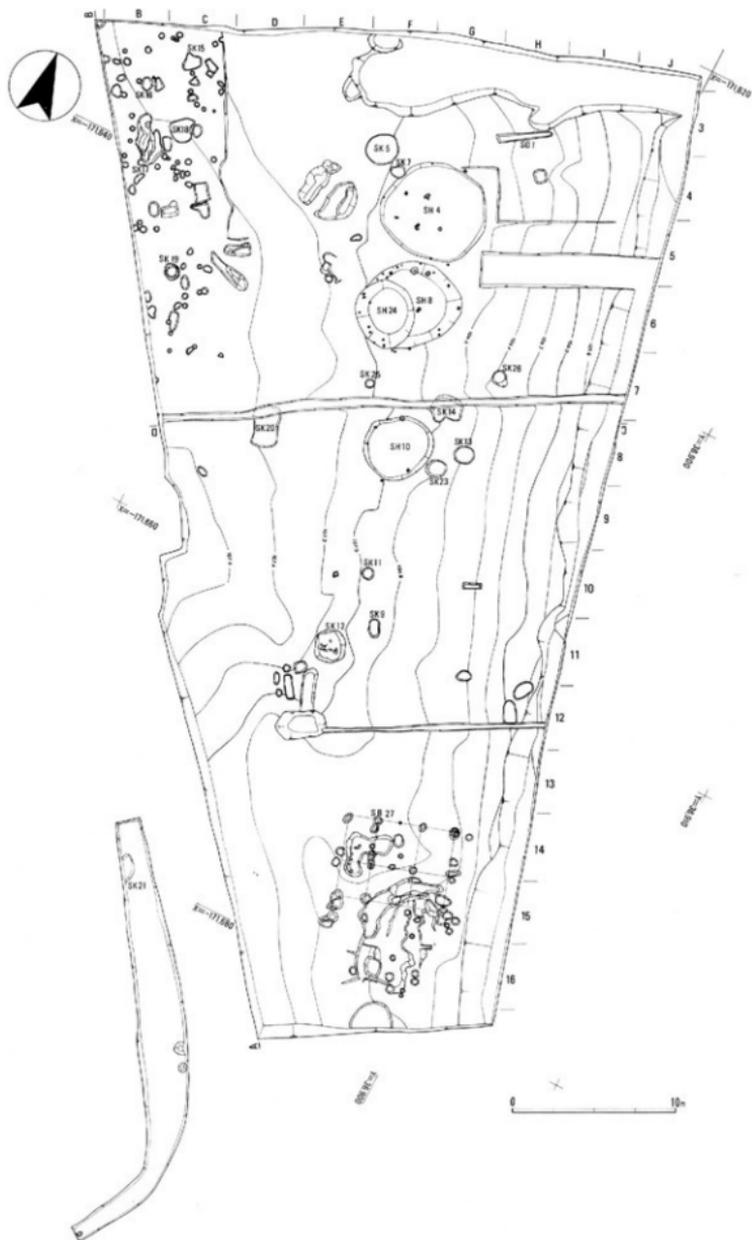
SK 23 (第11図) F・G 8グリッドで検出した。1.2m×0.9mの楕円形を呈し、深さは0.15mを測る。無文土器1点と剥片を確認した。

## 室町~江戸時代の遺構

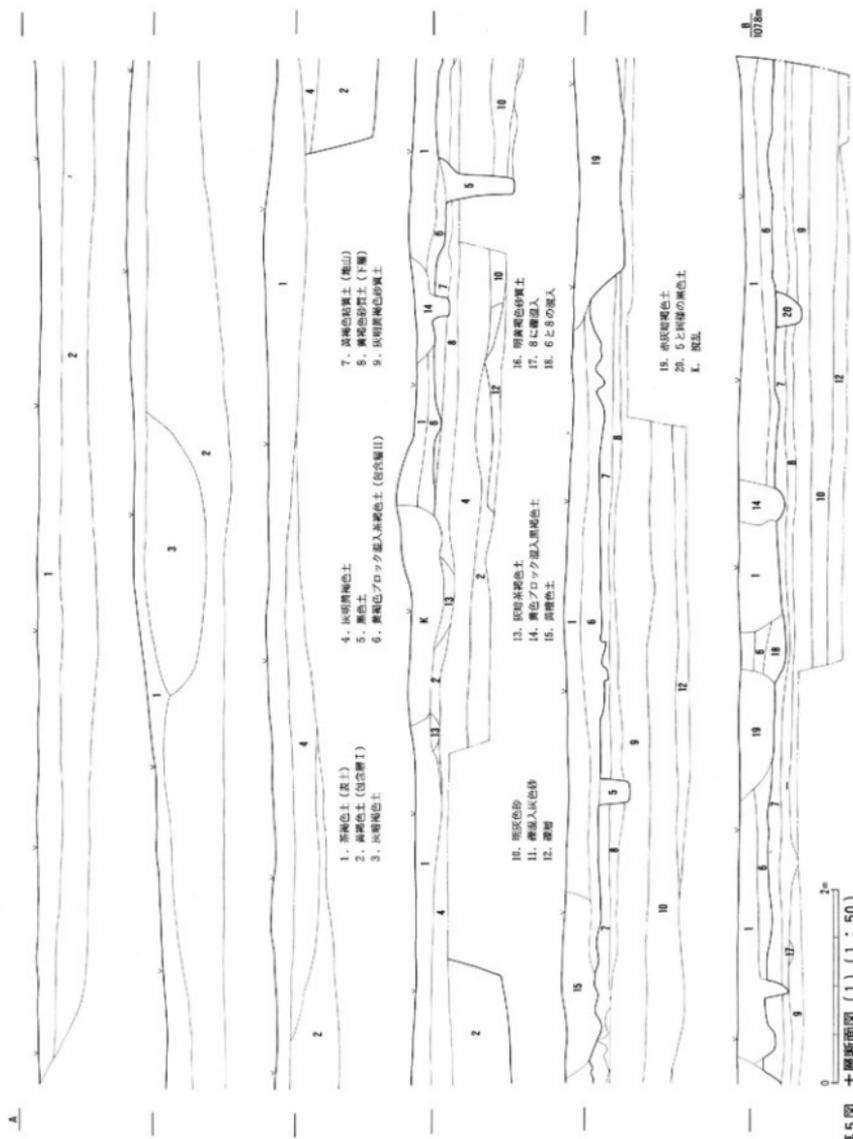
SB 27 調査区南方で1棟検出した掘立柱建物である。東西3間×南北2間の建物で、棟方向はE20°Nを示す。柱間は桁行が5.2mで梁行は6.9mを測る。柱掘形から天目茶椀が出土した。



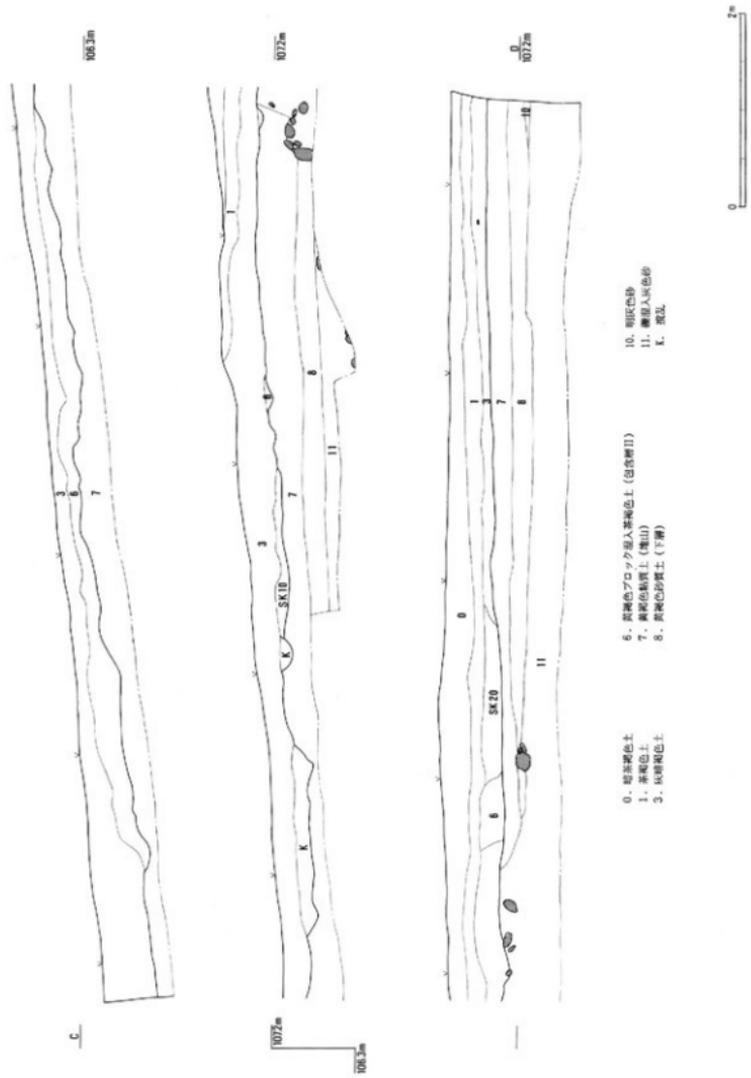
第3図 遺跡周辺の地層



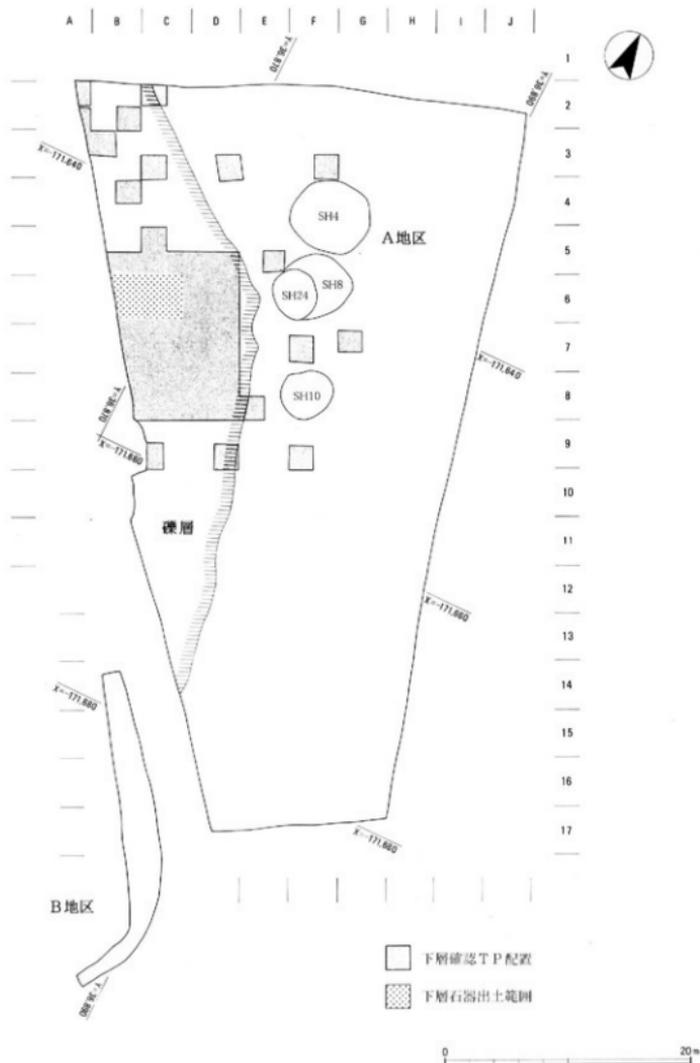
第4図 遺構平面図 (1 : 300)



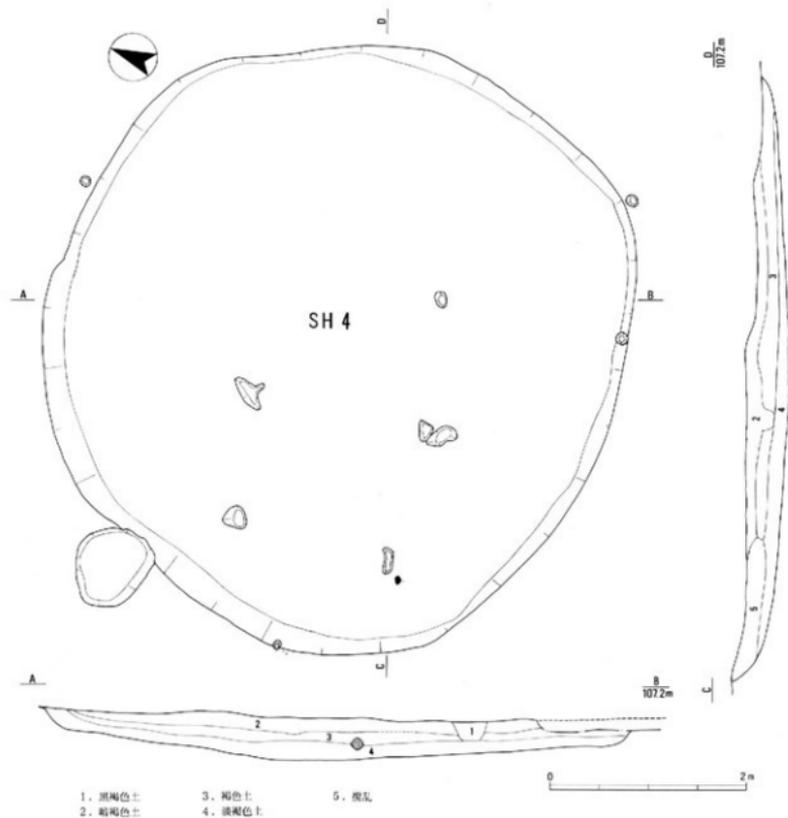
第5図 土層断面図 (1) (1 : 50)



第6図 土層断面図(2) (1:50)



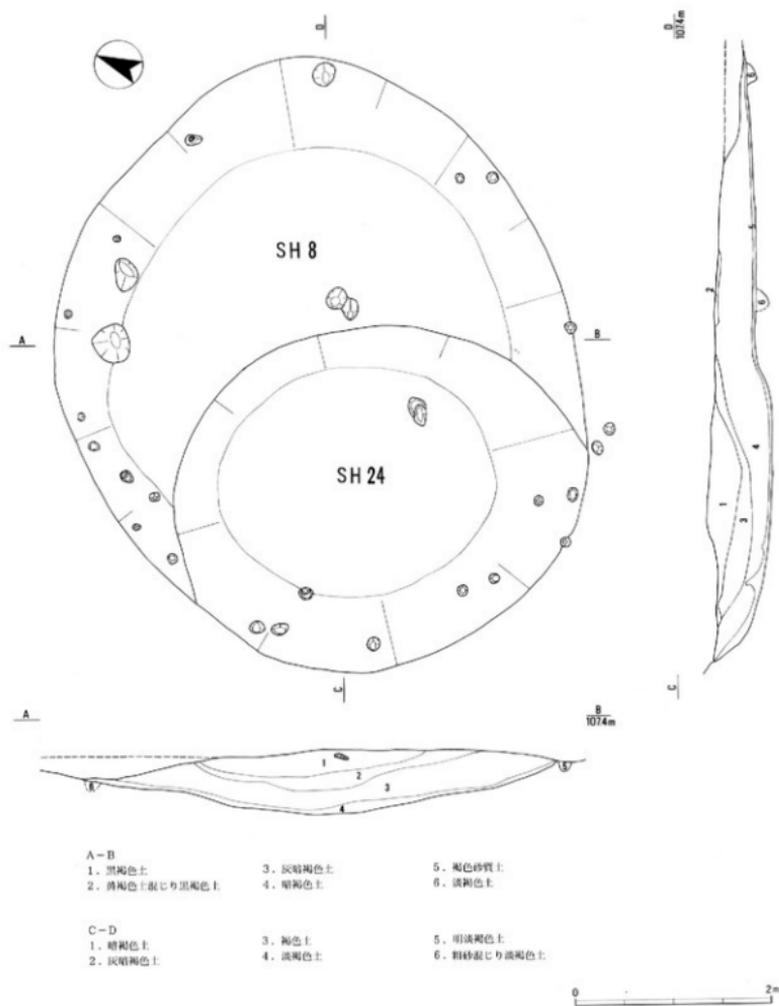
第7図 下層確認範囲図 (1 : 400)



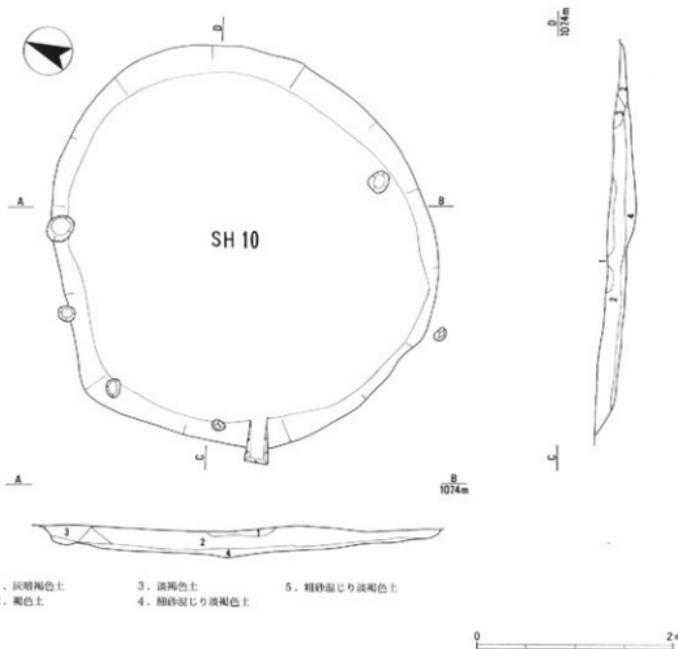
第8図 SH 4平面図・断面図 (1 : 50)

遺構番号	性格	小地区	形状	計測値 (長軸×短軸、現存深)	備考
SH 4	竪穴住居	FG4a-d, FSa-d, G5a-c	略円形	(5.5) × 5.4, 0.55	大きさは最終検出規模
SH 8	竪穴住居	ES-d, F5c-d, G5- c, F6-abd, G6-ac	略円形	6.0 × 5.5, 0.55	
SH 10	竪穴住居	ES-bd, F8a-d, F9-a	略円形	4.3 × 3.7, 0.25	
SH 24	竪穴住居	F5-c, E6-bd, F6-abcd	略円形	4.1 × (3.8) 0.65	

第1表 遺構一覧表 (1)



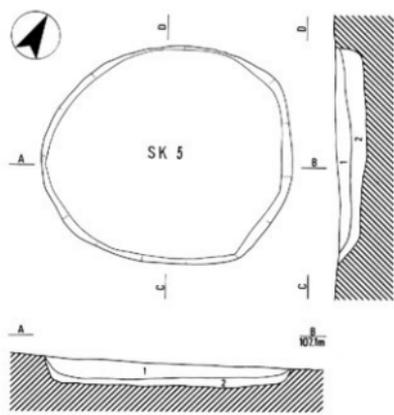
第9図 SH 8・24実測図(1:50)



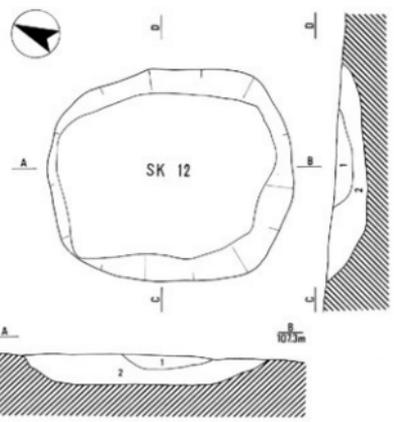
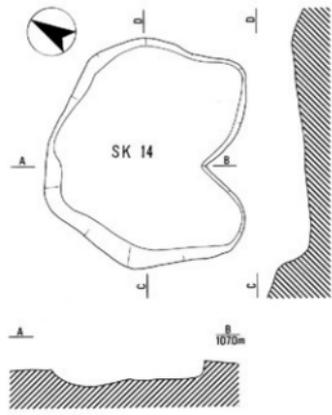
第10図 SH 10平面図・断面図 (1:50)

遺構番号	性格	小地区	形状	計測値(長軸×短軸、現存深)	備考
SD 1	溝	G3-d, H3-cd	U字形	3.0×0.6、0.27	近世以降か
SK 5	土坑	F3-4, G3-4	略円形	2.2×1.9、0.3	
SK 7	土坑	F4-a	円形	0.9×0.7、0.1	SH4と西側で接する
SK 9	土坑	E11-b, F11-a	長楕円	1.1×0.9、0.25	
SK 11	土坑	E10-bd, F10-ac	円形	1.0×1.0、0.3	
SK 12	土坑	E11-abcd	不定形	2.0×2.0、0.35	
SK 13	土坑	G8-c	略円形	1.2×1.1、0.2	
SK 14	土坑	F7d, G7c, F8b, G8a	不定形	1.9×1.5 (1.3)、0.3	
SK 15	土坑	C2-c	略円形	1.2×1.1	
SK 16	土坑	B3-b	不定形	0.9×0.8	
SK 17	土坑	B3a-d, B4-ab	不定形	3.2×1.5 (0.8)	
SK 18	土坑	B3-d, C3-c	不定形	1.5 (1.4)、0.16	
SK 19	土坑	B5-d	円形	1.0×0.9、0.2	
SK 20	土坑	D7-cd, D8-abcd	長楕円	2.6×1.7 (1.5)	
SK 23	土坑	F8-d, G8-c	略円形	1.2×0.9、0.15	
SK 25	土坑	E7-bd	円形円	0.6×0.5、0.1	
SK 26	土坑	G7-bd	長楕円	1.1×0.9、0.15	

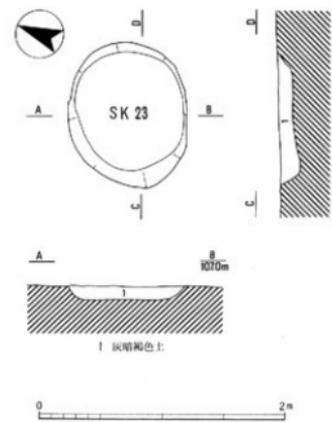
第2表 遺構一覧表 (2)



1 褐色土 2 微砂粘重入明褐色土



1 暗褐色土 2 明黄褐色土



1 灰明褐色土

第11图 SK 5 · 12 · 14 · 23 实测图 (1 : 40)

## IV 遺物

### はじめに

調査区から出土した遺物の総数は、12,816点であり、9,193点に番号を付した。このうち堅穴住居から出土したものは12,011点(93.7%)である。器種別構成は、剥片が11,381点(94.8%)、石器が183点(6.5%)、縄文土器が422点、母岩が12点、土偶が2点、石皿が2点、有舌尖頭器・石錐が各1点、搔器・楔形石器等が計3点である。他に混入品と見られる陶器が5点認められた。以下、器種別に記述していく。最後に下層(第5層)から出土した大型の剥片についてもまとめておく。なお、室町～江戸時代の遺物も微量出土した。

### 1 土偶

1は、長さ6.8cm、幅4.2cm、胴の厚さ2.6cmである。SH8から出土した。全体形は、やや膨らみのある逆三角形を呈する。埋没中に頭部が剥離したものとみられる。頭部と乳房が、体上部に貼り付けられており、その後丁寧にナダられている。胴体側面の形状は、頭部に向かってやや内反る。腕は、体部粘土を少々引き出して表現している。さらに、SH10からも同形同大の土偶頭部(2)が1点出土した。褐色土中から出土し、体部からは剥離した状態であった。長さは2.1cmである。前面は垂直に成形されており、後部はやや膨らみをもつ曲線で仕上げられている。調整方法は1と同様で、側面は指ナダによって、面取りが施されている。

### 2 縄文土器

総数422点のうちSH4から110点、SH8は65点、SH24から178点、SH10から69点が出土しており、床面形状が最も深いSH24からの出土量が42%を占め、また、出土位置も北西端部の床から法面部分にかけて集中的であった。器種別には無文が殆どで、器厚も薄手であることが特徴である。

なお、3・8・15はSH8から、5・20はSH10から、4・6・7・9・14・16・19・21はSH24から出土した。順に記述する。

**隆線文土器** 3は残存する体部小片である。体部外面の隆帯部は粘土紐を貼り付け後に押し引きされ

ているカナダられているとみられる。幅は9mmで、方向は縦位である。体部の厚みは6mmである。他に隆線文と確認できる細片がSH24、SH10から各1点づつ出土している。

**爪形文土器** 4～5とも口縁部に圧痕が認められたもので、4の口縁は屈曲して外反気味に立ちあがる。上端部には指圧痕が認められる。外面中央に斜方向の爪圧痕がみられる。5は細片である。口縁内面には爪圧痕が、外面には指頭圧痕が認められる。ともに器厚は薄い。

**無文土器** 6～10・12～20は口縁部から体部の残片である。器形で大別すると、側面が直立に近いもの、緩くS字状となるものに分けられる。6～9の口縁の残存状況は良好で、調整も丁寧である。7の口縁はヨコナダが施され、ややハの字形に開く。10や12の器形は後者で、底部も丸底になるものと考えられる。10の口唇部は外反し、側面は、ほぼ下方に垂下し、底部は丸みを帯びる。12の断面では、幅1cm弱間隔で粘土紐の接合痕が認められた。内面では煤が付着していた。14の内面には粘土の積み上げによる成形痕が認められた。15の器厚はやや薄く、5mmを測る。内外面に指頭圧痕が認められる。16・18は胎土・焼成から同一個体ともみえる遺物である。

ともに、内面上端にナダ上げが施されている。20は唯一、底部の形状が予想されるもので、器厚は3mmを測る。平底に近い丸底になるものであろうか。22は包含層出土の遺物であるが、口径が復元できるもので、15cmを測る。器面は丁寧なナダられ、内面には指頭圧痕が認められる。炭化物も付着している。

**条痕状施文土器** 11は体部の残片である。器厚は5mmである。擬口縁が認められる。体部外面はやや外反し、施文はみられない。内面には条痕状の施文具によるハケメが施される。また、外面には煤が付着し、内面下部には炭化物とみられるものが付着している。

**縄文圧痕土器** 21は平底の底部残片である。器厚は6mmで、圧痕は、内面に遺存するものと考えられる。これは、1条の縄の側面圧痕である。外面には炭化物が付着している。

### 3 石器・剥片

聖穴住居から出土した点数は12,011である。判別できたものは、そのうち石鏃が計170点で1.4%を占める。矢柄研磨器は5点、削器は4点である。尖頭器は2点で、石鏃も2点含まれる。他に包含層から有舌尖頭器が1点出土している。後述するが、今回報告する石鏃には一次剥離面を大きく残したまま、二次剥離を施した例が多くみられる。以下、順に残存率の高かったものを抽出し、報告する。

**矢柄研磨器** 23~27の石材はすべて砂岩である。23は残長11.2cmの大型品である。溝1条が施されるが、風化が激しく、擦痕は不明瞭である。27は、溝は有しないが中央に擦痕が認められ、23~26と同材・同形状であるため、未製品とした。幅広い擦痕が認められる。23・24がSH4、25はSH8、26はSH10、27はSH24からそれぞれ出土した。

**石鏃** 28~82のうち石材は、29・42がサヌカイトで、他は全てチャートである。選別別に整理し、以下、概観する。

28~44は凹基無茎の三角鏃に類する。これらの石材はほとんどが褐色灰色チャートである。以下、分類は久保勝正氏の論考を引用し、行った。

28~32は、SH4から出土した。28は二等側辺のA1a型(以下「型」を省略)である。29は長さ1.52cmの大型品で、サヌカイト製である。28と同形状で、周縁加工が表、裏面に丁寧に施されている。30は表面剥離が節理に当たって乱れ、コブ状になって残存している。31はチャートで両側縁が若干外に膨らんでいる。B2aである。32はA7の平基無茎鏃である。これの裏面基部には、小剥離がみられる。

33~36はSH8から出土したものである。33は焼土ブロックを含む褐色土から出土した。形状は二等側辺で、脚部は尖り、先端部は内傾する。裏面ほど素材面を良好に留めている。34の抉りの深度は非常に浅いため、同氏分類に当てはめると、凹基無茎鏃に属する。35は長さ2.1cm、幅1.56cm、厚さ0.3cmを測り、調査区内では大型品と言える。長脚で、尖鋭であり、抉入部が深いA1cに相当する。

36の形状は長細形で尖鋭であることが特徴的なA1cである。ただし、先端部が一部折損している。剥離調整が全体的に均一でなく、素材面も多く残し

ている。

37~40はSH24から出土した。37は長さ1.37cm、幅1.61cm、厚さ0.25cmを測る。石材はサヌカイト製で、型式ではB2bに属する。左脚部が不揃いであるが、欠損ではない。38は形状や調整で35と類似する。38の黒チャート鏃はA1aに該当する。側縁部の小剥離が不均一である。39は平基に近い、抉りの施されたA1aに類する。40は、長さ1.45cm、幅1.49cm、厚さ0.3cmの淡灰色チャートである。やはり平基に近く、抉りの浅いA1aに相当する。

41~44はSH10から出土した。41の表面には欠損剥離があり、重心点近くは分厚い。右脚部の先端は欠損している。42はサヌカイト製である。形状はA1bである。左側縁の剥離は他と比べるとかなり大きい。脚部の先端は左右ともに、裏面から剥離調整が行われている。他より随分丸みを帯びている。43の先端は尖鋭で、脚部は平基に近く、A1aである。44は43と同形状のものであるが、刃こぼれがみられる。

45以降の遺物にも特徴的な調整が施されているものがあるが、概略を記しておきたい。形状からみた場合、側縁が直線的なA類が多く含まれ、46・59・65・72・75・77・79・80のように一次剥離をどめたと表裏面に、二次剥離を施しているのが特徴的である。また、長細で先端が尖鋭な71は、他よりも側縁部の剥離が大きく、加工が不揃いである。79は唯一、凸基無茎の遺物で、上記のように脚部を有せず、基部は小剥離によって、わずかに丸く収められている。73は長さ2.1cm、幅2.0cmである。表は節理のために、コブに当たって右脚部の調整が不均一である。46・74は一次剥離面を表裏に留めながら、二次調整が裏面に施されているため、製作段階の未製品と考えられる。ただ、おそらくは二等側縁加工を施す遺物であるとみられる。また、58・67・68・81は、一次剥離をほとんど留めず、素材全面に細かい剥離、調整が施されており、脚長もほぼ均等である。

**尖頭器** 83・84はそれぞれSH8やSH24から出土した。83は下部が欠損していて、全体形は不明である。表裏面ともに小剥離が丁寧に施されている。裏面には一次剥離面がわずかであるが残存している。84も下部に二次調整時の剥離が認められるが、未製

品であり、石鏃とも考えられる。85は堅穴住居近くの包含層から出土した有茎尖頭器である。石材はサヌカイトである。刃部の先端は丁寧な剥離が施されていて、残存も良好である。裏面の下半部調整は表面よりも粗く、剥離もやや大きい。基部はやや丸く仕上げられている。

**掻器・楔形石器** 86・87はチャート製である。86は、周縁部全体に二次加工が施されている。右下辺には丁寧な小剥離が施され、刃部として機能している。

#### (参考文献)

- ① 久保勝正「縄文時代早期における石鏃形態とその変遷」(『考古学博物館』研究紀要二)1993年  
② 赤坂栄三「石器研究の一方法」(『人類学雑誌』第4巻第3号 東京人類学会、1929年)

たとえられる。87は、円形、小型の遺物である。素材が小さく、刃部の周縁加工も不規則である。

**大型剥片** 88・89は、礫層上の黄褐色砂質土で確認した遺物である。88の素材は頁岩で、裏表面ともに自然礫面をとどめ、一次調整が認められる。

89の表面右上部では、微細な剥離痕が認められた。石材はチャートである。これら2点を含め、下層からは大小様々な剥片が86点出土した。そのうち接合資料も2組確認できている。

- ③ 鈴木道之助「石器の形態と分類」(『石器入門事典』柏書房 1991年)

- ④ 『縄文時代早期編』資料集 横浜市歴史博物館・埋蔵文化財センター編、1996年

## V 結 語

### 1 堅穴住居の遺物の器種構成 (第12図)

今回の調査で確認した堅穴住居は4棟である。出土した土器は無文を主体としており、隆線文や爪形文も認められた。これらは縄文時代草創期に属する。石器は、ほとんどが遺構内の褐色土から出土したものである。

個別に特徴をみると、SH4からは、土器が110点出土したが、これらは様々な部片である。その多くが2~3 cm角に満たない小片で、器形を復元できるものはほとんどない。爪形文や条痕状の調整を施すものは認められない。土器に次いで多いのが石鏃である。これは45点を数え、25.4%を占める。

SH8は圧倒的な剥片を除くと、土器は65点で、これの内訳は隆線文土器1点と、他は無文土器である。次に多いのが64点の石鏃である。これは全体で36.2%を占める。

SH10では、土器が59点を数える。すべて無文土器である。次に石鏃の11点が挙げられる。

最後に、SH24であるが、SH8と重複する地点から出土した遺物については、条件的に不明瞭な箇所があったので、1割程度、SH8に含めるものもあろう。とにかく、土器は178点で圧倒的多数である。無文を主体に、爪形文や条痕調整を施すものや縄文の圧痕を残す土器が含まれる。

なお、特に、石器の器種構成については、資料の整理途中段階で把握したものであるため、今後、詳細な分析を加えることで、上記の点数についても若干修正を加えなくてはならない。土器についても小片であり、今後、接合復元されるものもあろう。

### 2 石鏃

今回報告するものは、遺存率の高い55点である。前述したが、型式分類は久保氏の石鏃型式分類をもとに行った。この他に未製品も含まれるが、判別・分類できないものは除外した。

器種的には圧倒的に凹基無茎の三角鏃が9割以上を占める。平基や凸基を有するものは各1点ずつであった。さらに型式別には、A1aに相当するものが大半で、抉り深度も3段階までは及ばない小型の遺物が目立った。土器との共存関係も考え、組成を考察すると、長脚や五角形の石鏃が1点も含まれていない。

### 3 土偶

類例のない草創期の土偶が出土したことは特筆できよう。1点はほぼ完形、他の1点は頭部片であるが、同形同大である。出土状況は、ともに廃棄された状態で堅穴住居の埋土中から出土した。完形のもの、頭部が体部から剥離していたものの、埋設中にその場で剥離したに過ぎず、完形品が廃棄された

と判断される。

それぞれの製法は次のようである。

やや厚みのある粘土を体部に形作り、上部左右端から粘土を少し引き出して、両腕を表出させている。また、頭部と乳房は別な粘土を貼り付けている。頭部は多面形を呈しているが、貼付け時の成形、調整によるものとみてよいであろう。体部下端は丸くナデられていて、両脚の表現はされていない。顔面や性器も表現されておらず、全体に文様もない。

#### 4 竪穴住居の構造と存続時期

検出した4棟は調査区北側の比較的標高の高い106.5m前後に立地する。どの竪穴住居も円形で、ゆるく船底状に掘り窪められた床面を持つものであった。広さとしては最大で約28㎡である。床面には炉を設営したという痕跡は検出できなかった。小穴は円形で、直径が10cm内外の小規模なものであった。これらは、ほとんどが周縁部から30～50cm程度内側寄りの法面に検出された。断面形は中心部にむかって斜方向であった。直立する「壁柱穴」というよりむしろやや内傾する「垂木穴」と考えられる。

住居跡4棟の前後関係について触れておきたい。

まず、SH4とSH8とは近接でほとんど空間がみられず、また、逆にSH8とSH10とは4m弱の広い空間が保たれている。さらに、SH24はSH8が埋没した後に掘られたもので、重複している。この点は検出の結果から明かである。出土遺物や遺構の検出状況から想定すると、存続時期は次のとおりである。

SH4・10、あるいはSH8・10又は、SH10・24は同時存在した可能性がある。したがって、一期には1基か2基が存在したものと考えられる。こうした様相を呈することから、これらの竪穴住居は複数回の建て替えがなされたことが窺える。しかし、この建て替えは継起的なものか、断続的かは不明である。出土土器が無文を主体としながらも、隆線文や爪形文等を含むことから、ある程度の時間幅があったと推察される。隆線文土器や爪形文土器が無文土器と同時期なら、比較的短時間に営まれたことになる。すると、複数回の建て替えは、人々の特定地点・特定地域への回帰を示すものと理解され、「定住」への指向性を示している。また、逆に断続的

であると、「定住」と判断することはできないことになろう。今後の調査例をふまえて、考察を深めていきたい。

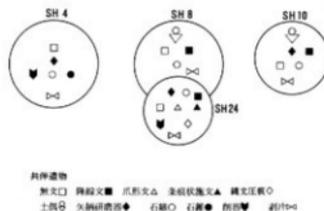
#### 5 下層出土の大型剥片

竪穴住居の西方で実施した下層確認の調査で出土した剥片は、石材がチャートであり、竪穴住居内から出土したものと同質であった。しかし、調整においては異質であり、一次調整のみを加えた比較的大形の剥片であった。また、製品は1点も認められなかった。テストピットのうちのB-C6グリッドの黄褐色砂質土から出土したものである。総数は86点であった。

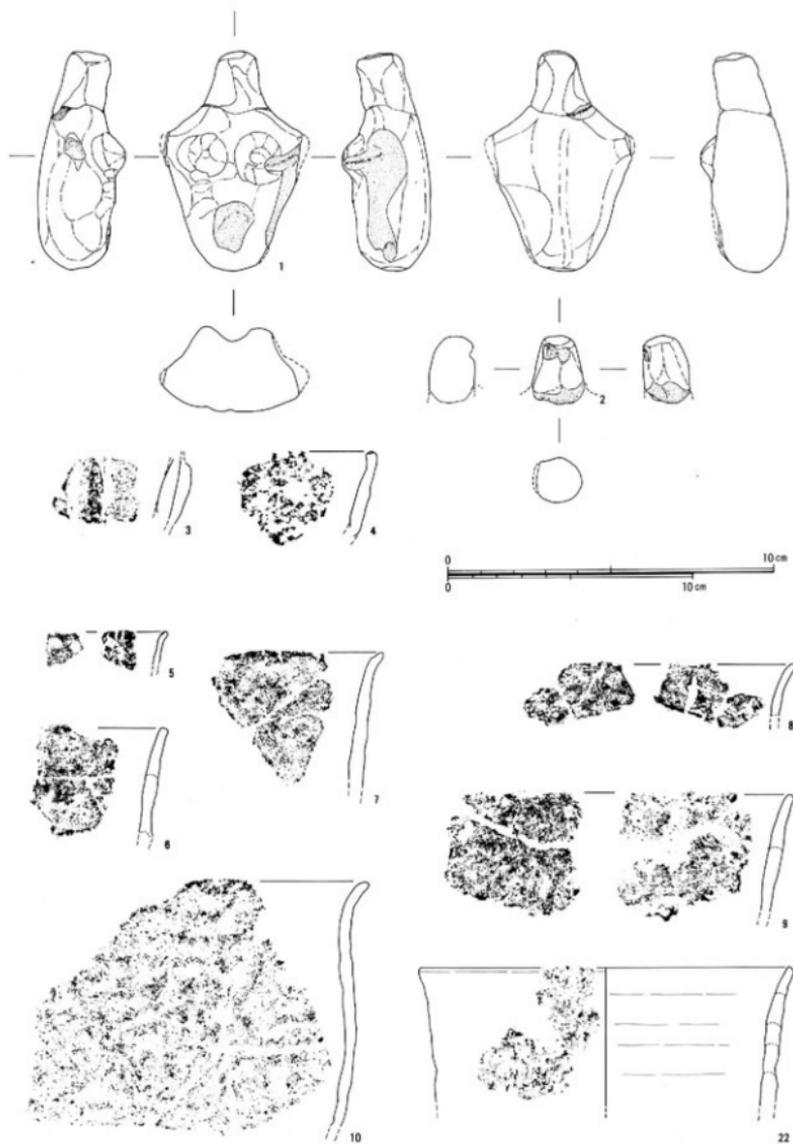
これらは、露出した礫層から石器の素材となりうるチャートを採集し、その場で荒削りして選別した痕跡と考えられる。剥片そのものからでは、旧石器時代か縄文時代かの判断は、不可能であるが、層位から草創期以前であることは間違いない。いずれにせよ、石器素材の採掘跡の早い例として注目に値しよう。(中川明)

#### (参考文献等)

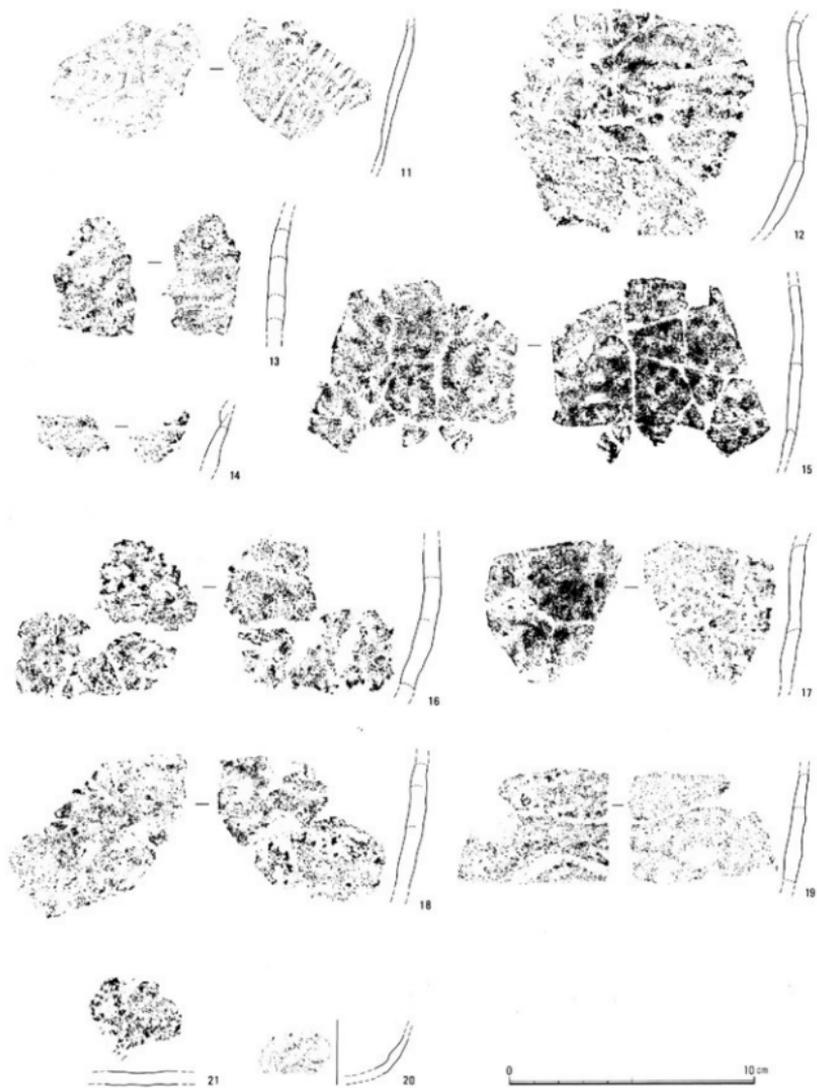
- ① 石野博信「古代日本の住居」『日本原始・古代住居の研究』吉川弘文館、1993年
- ② 山田隆「埋蔵、竪穴住居」『大泉遺跡』本文編、三重県埋蔵文化財センター、1994年
- ③ 宮本長二郎「縄文時代竪穴住居の変遷」『日本原始古代の住居建築』中央公論美術出版、1996年



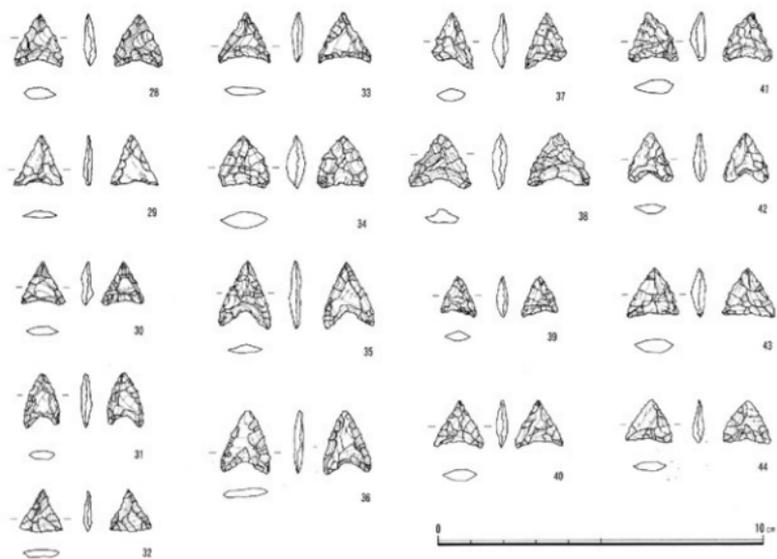
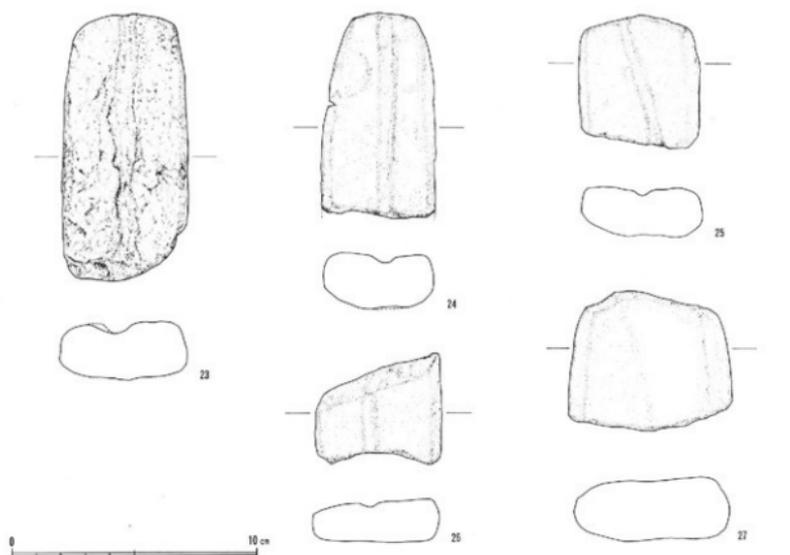
第12図 竪穴住居出土遺物の器種組成



第13図 出土遺物実測図 (1) (1・2は2:3、他は1:2)

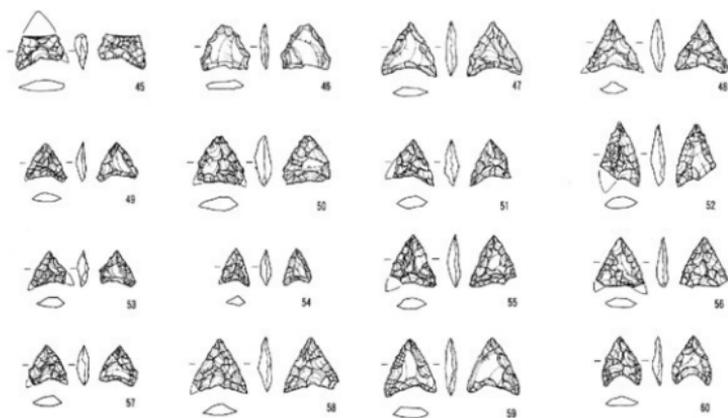


第14图 出土物实测图(2)(1:2)



第15図 出土遺物実測図(3) (23~27は1:2、他は2:3)

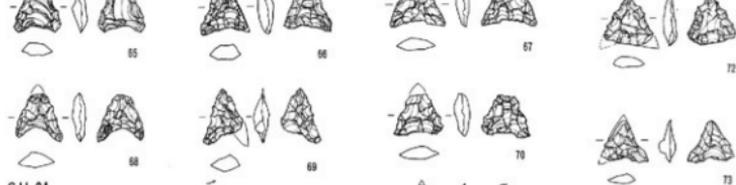
SH 4



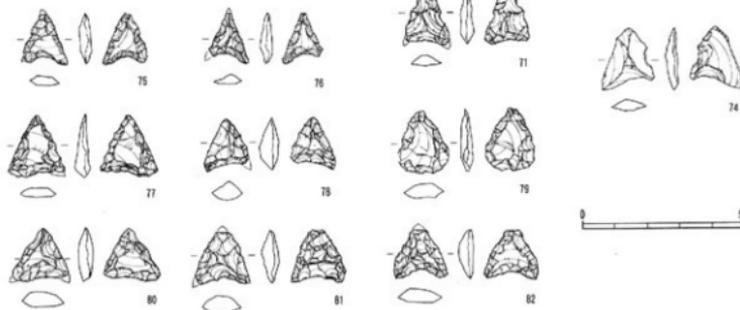
SH 8



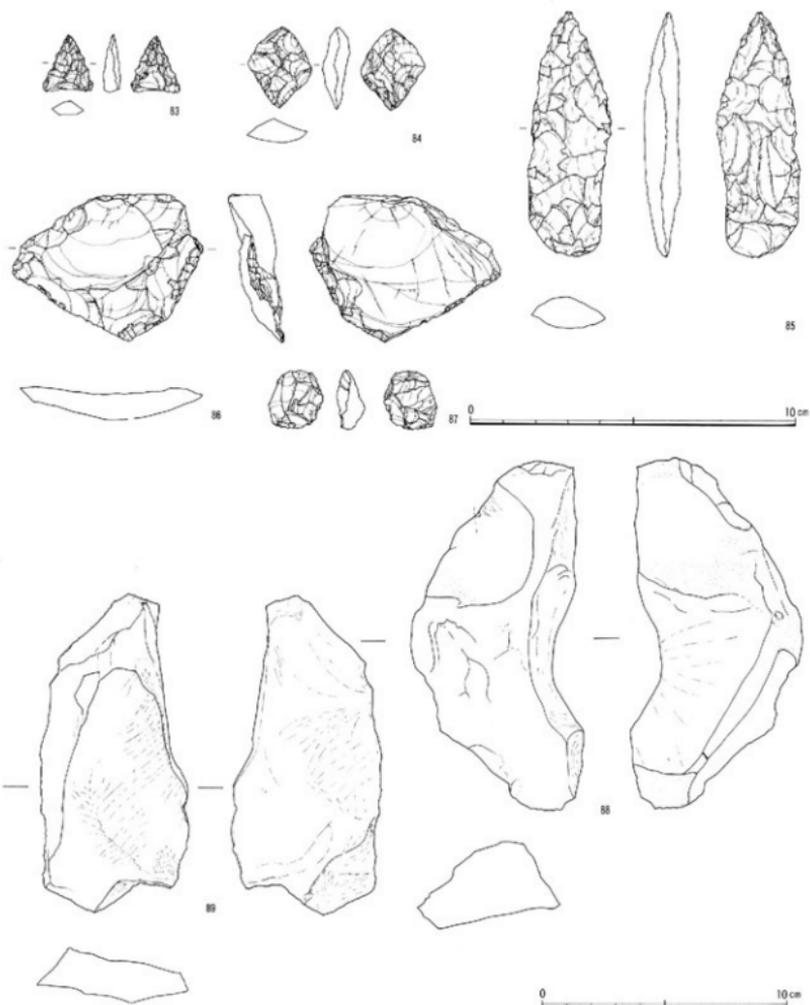
SH 10



SH 24



第16图 出土遗物实测图(4)(2:3)



第17図 出土遺物実測図(5)(83~87は2:3、他は1:2)

報告 番号	実測 番号	器種	遺構 番号	地区	取上 No	層位	出土位置			調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
							W-E	N-S	海拔高度						
1	005-01	土偶	SH8	F6-b	1283	赤褐色土	167	134	106.59	顔面、乳房貼り付け後ナデ、背面に凹線1条	密	良	灰黄褐色 10YR7/6	6.8, 4.2, 2.6 (cm)	
2	005-02	土偶 頭部	SH10	F8-c	60	褐色土	27	54	106.88	側面、面取りナデ 下部剥離面を残す	やや 粗	並	にぶい褐色 7.5YR7/4	2.1, 1.6	
3	001-01	隆線文	SH8	F6-b	588	赤褐色土	155	94	106.58	外：貼り付け後ナデ、 内：ヨコナデ	粗	並	にぶい赤褐色 5YR5/4	体部 小片	経寸補綴 線文、横 付着
4	001-02	爪形文	SH24	F6-c	193	褐色土	179	185	106.69	外、内：ヨコナデ、腰 口縁	粗	並	にぶい赤褐色 5YR5/4	口縁部 小片	
5	003-02	爪形文	SH10	F8-a	12	褐色土	157	140	106.91	外：ヨコナデ、指頭痕 内：キザミ	密	良	黄褐色 10YR6/7	口縁部 小片	
6	002-01	無文	SH24	F6-d	557	褐色土	47	73	106.50	外：ヨコナデ、内：ナ デアク、指頭痕	粗	良	黄褐色 7.5YR3/2	口縁部 小片	
7	001-04	無文	SH24	F6-a	184	褐色土	163	74	106.65	外：ヨコナデ、内：ヨ コナデ、条線	粗	良	にぶい赤褐色 5YR5/4	口縁部 小片	
8	004-04	無文	SH8	F5-c	32	褐色土	163	153	106.90	外、内：ヨコナデ、ナ デアク	密	良	黄褐色 10YR6/7	口縁部 小片	炭化物 付着
9	004-02	無文	SH24	E6-b	45-2	褐色土	182	37	106.75	外、内：ヨコナデ	密	良	灰黄褐色 10YR4/2	口縁部 小片	
10	001-05	無文	SH24	E6-b	45-3	褐色土	182	37	106.75	外、内：ヨコナデ	粗	良	にぶい褐色 7.5YR6/4	口縁～ 体部	
11	001-03	条線状文	SH24	F6-a	125	褐色土	68	30	106.68	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ、 条線状文、腰口縁	密	良	オリーブ黄 7.5YR/3	体部 小片	
12	003-05	無文	SH24	E6-b	45-2	褐色土	182	37	106.75	外、内：ヨコナデ、指 頭痕	やや 密	良	にぶい黄褐色 10YR6/4	体部片	煤付着
13	003-01	無文	SH24	F6-c	132	褐色土	75	90	106.76	外、内：ヨコナデ、指頭圧痕	密	良	黄褐色 10YR6/7	口縁部 小片	炭化物 付着
14	003-04	無文	SH24	F6-c	264	褐色土	136	100	106.66	外、内：ヨコナデ、粘 土層上げ痕	密	良	にぶい褐色 7.5YR5/4	口縁部 小片	炭化物 付着
15	004-05	無文	SH8	F5-c	32	褐色土	163	153	106.90	外、内：ヨコナデ、指頭 痕	密	良	黄褐色 10YR6/7	体部片	
16	004-03	無文	SH24	E6-b	45-2	褐色土	182	37	106.75	外、内：ヨコナデ、指 頭圧痕	やや 粗	良	にぶい黄褐色 10YR6/4	体部片	炭化物 付着
17	002-06	無文	SH24	F6-a	626	褐色土	86	56	106.49	外、内：ヨコナデ、指 オサエ	やや 密	良	黄褐色 10YR6/7	体部 小片	炭化物 付着
18	004-01	無文	SH24	E6-b	45-2	褐色土	182	37	106.75	外、内：ヨコナデ、指 頭圧痕	密	良	黄褐色 10YR6/7	体部片	炭化物 付着
19	002-04	無文	SH24	F6-a	658	褐色土	49	100	106.30	外：ヨコナデ 内：ヨ コナデ、指頭圧痕	密	良	にぶい黄褐色 10YR6/4	体部 小片	炭化物 付着
20	002-02	無文	SH10	F8-b	59	褐色土	53	138	106.79	外、内：ナデ	密	良	にぶい黄褐色 10YR6/3	底部 小片	炭化物 付着
21	003-03	縄文瓦葺	SH24	F6-a	1090	灰暗褐色土	139	143	106.58	外、内：ヨコナデ、指 頭圧痕	密	良	にぶい黄褐色 10YR6/3	底部 小片	炭化物 付着
22	002-03	無文	包含層	—	—	—	—	—	—	外：ヨコナデ、ナデアク 内：ヨコナデ	密	良	黒色10YR2/1	口縁部 小片	炭化物 付着

第3表 出土遺物観察表(1)

報告 番号	実測 番号	器種	遺構 番号	地区	取上No	層位	出土位置			型式	材質	長	幅	厚	重/脚長	残存度	備考 ( )内は 現存長厚
							W-E	N-S	海拔高度								
23	006-01	矢柄研 磨器	SH4	F4-b	209	褐色土	111	167	106.68	—	砂岩	11.2	5.40	2.4	重174.1	風化激	有溝1条
24	007-01	矢柄研 磨器	SH4	F5-b	93	暗褐色土	25	3	106.62	—	砂岩	8.60	4.50	2.0	重103	風化激	有溝1条
25	009-02	矢柄研 磨器	SH8	F6-a	1124	灰暗褐色 土	75	200	106.43	—	砂岩	5.60	5.00	2.0	重72.2	一部欠損	有溝1条
26	009-01	矢柄研 磨器	SH10	F8-c	17	褐色土	73	35	106.84	—	砂岩	4.70	5.20	1.8	重52.1	一部欠損	有溝1条
27	008-01	矢柄研 磨器	SH24	F6-b	1435	灰暗褐色 土	153	123	106.53	—	砂岩	5.60	6.70	2.7	重126.8	一部欠損	
28	010-04	凹基 無茎竈	SH4	G4-a	29	褐色土	82	150	106.72	A1a	チャート	1.60	1.45	0.4	重0.6	完存	筋あり
29	011-02	凹基 無茎竈	SH4	F4-b	108	褐色土	190	160	106.74	A1a	ワスカイト	1.52	1.41	0.21	重0.34	完存	
30	012-03	凹基 無茎竈	SH4	F4-d	135	褐色土	93	170	106.79	F6b	チャート	1.30	1.31	0.32	重0.39	完存	
31	013-01	凹基 無茎竈	SH4	F4-d	193	暗褐色土	135	127	106.73	B2a	チャート	1.62	1.05	0.32	重0.45	完存	
32	010-01	凹基 無茎竈	SH4	F4-d	307	暗褐色土	190	190	106.84	A7	チャート	1.35	1.20	0.2	重0.28	完存	
33	011-01	凹基 無茎竈	SH8	F5-d	187	赤褐色土	15	139	106.59	A1a	チャート	1.50	1.59	0.31	重0.48	完存	粘土ブロッ ク出土
34	014-02	凹基 無茎竈	SH8	F5-c	186	褐色土	147	188	106.61	A1a	チャート	1.58	1.55	0.55	重1.08	完存	尖鋭
35	010-03	凹基 無茎竈	SH8	F6-d	789	淡褐色土	14	66	106.52	A1c	チャート	2.10	1.56	0.3	重0.65	完存	長細
36	010-02	凹基 無茎竈	SH8	G6-a	64	褐色土	46	158	106.55	A1c	チャート	1.90	1.50	0.3	重0.62	完存	長細
37	013-03	凹基 無茎竈	SH24	E6-b	45	褐色土	182	37	106.75	A1b	チャート	1.72	1.25	0.41	重0.53	完存	脚部不揃 い
38	010-05	凹基 無茎竈	SH24	E6-d	47	褐色土	139	48	106.66	A1b	黒チャート	1.65	1.90	0.4	重0.85	完存	
39	018-01	凹基 無茎竈	SH24	F6-c	613	褐色土	41	112	106.54	A1a	チャート	1.23	1.08	0.32	重0.3	完存	脚部不揃 い
40	012-01	凹基 無茎竈	SH24	F6-c	673	褐色土	160	13	106.40	A1a	チャート	1.45	1.49	0.3	重0.44	完存	尖鋭
41	012-02	凹基 無茎竈	SH10	F8-a	12	褐色土	157	140	106.91	A1a	チャート	1.50	1.49	0.48	重0.74	ほぼ完存	
42	010-06	凹基 無茎竈	SH10	F8-a	60	褐色土	131	137	106.84	A1b	ワスカイト	1.50	1.35	0.3	重0.54	完存	
43	014-03	凹基 無茎竈	SH10	F8-a	135	褐色土	86	103	106.85	A1a	チャート	1.50	1.56	0.4	重0.68	完存	
44	015-01	凹基 無茎竈	SH10	F8-a	219	淡褐色土	0	158	106.86	A1a	チャート	1.30	1.40	0.3	重0.47	完存	刃こぼれ 有り
45	019-01	凹基 無茎竈	SH4	F4-b	52	褐色土	78	127	106.90	A2b	チャート	1.08	1.45	0.5	脚2	先・右脚	上部欠
46	020-01	凹基 無茎竈	SH4	F4-b	56	褐色土	166	111	106.80	—	チャート	1.40	1.50	0.2	—	—	
47	021-01	凹基 無茎竈	SH4	F4-b	101	褐色土	60	180	106.70	B2-a	チャート	1.70	1.70	0.3	脚3	先・両脚	
48	022-01	凹基 無茎竈	SH4	F4-c	13	褐色土	103	172	106.64	A3-a	チャート	1.63	1.65	0.4	脚3	先・両脚	
49	023-01	凹基 無茎竈	SH4	F4-c	199	褐色土	200	24	106.50	A1-a	チャート	1.20	1.27	0.3	脚2	両脚	小 左足は 新しい傷
50	024-01	凹基 無茎竈	SH4	F4-d	81	褐色土	173	192	106.86	A1-a	チャート	1.50	1.45	0.5	脚2	先・両脚	
51	025-01	凹基 無茎竈	SH4	F4-d	112	褐色土	90	140	106.81	A1-b	チャート	1.45	1.25	0.4	脚2	左脚	
52	026-01	凹基 無茎竈	SH4	F4-d	216	褐色土	197	159	106.73	A1-b	チャート	1.95	1.25	0.4	脚3	左脚	
53	027-01	凹基 無茎竈	SH4	F5-a	38	褐色土	112	91	106.58	A2-a	チャート	1.13	1.13	0.3	脚2	両脚	小
54	028-01	凹基 無茎竈	SH4	F5-a	44	褐色土	74	67	106.61	A2-b	チャート	1.15	0.9	0.3	脚3	左脚	小
55	029-01	凹基 無茎竈	SH4	F5-b	83	褐色土	62	155	106.61	A3-b	チャート	1.60	1.40	0.4	脚2	左脚	

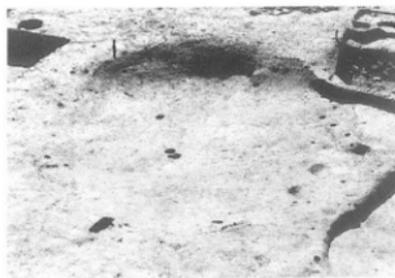
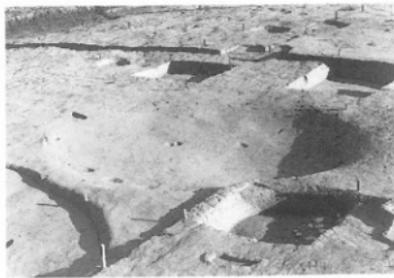
第4表 出土遺物観察表(2)

報告 番号	実測 番号	器種	遺構 番号	地区	取上No	層位	出土位置			型式	材質	長	幅	厚	重/脚長	残存度	備考 ( )内は 現存長さ
							W-E	N-S	海拔高度								
56	030-01	凹基 無葺瓦	SH4	F5-b	125	褐色土	108	63	106.64	A6-a	チャート	1.60	1.50	0.4	脚2	両脚	
57	031-01	凹基 無葺瓦	SH4	G4-a	32	褐色土	50	182	106.66	B2-b	チャート	1.25	1.17	0.4	脚2	先・両脚	小
58	032-01	凹基 無葺瓦	SH4	G4-c	172	褐色土	7	13	106.81	A1-a	チャート	1.70	1.70	0.4	脚3	右脚	
59	033-01	凹基 無葺瓦	SH4	G4-c	206	褐色土	75	37	106.64	A1-b	チャート	1.80	1.60	0.3	脚3	—	典型品
60	034-01	凹基 無葺瓦	SH4	G4-c	276	褐色土	130	164	106.61	A3-b	チャート	1.55	1.22	0.3	脚4	—	
61	035-01	凹基 無葺瓦	SH4	G4-c	302	褐色土	133	156	106.72	A1-a	チャート	1.30	1.55	0.3	脚2	—	
62	036-01	凹基 無葺瓦	SH8	F5-c	174	褐色土	192	190	106.60	A1-b	チャート	1.40	1.17	0.4	脚3	右脚	小
63	037-01	凹基 無葺瓦	SH8	F5-d	101	褐色土	150	181	106.71	A1-b	チャート	1.90	1.50	0.5	脚2	両脚	
64	038-01	凹基 無葺瓦	SH8	F6-b	143	褐色土	155	4	106.69	A1-b	チャート	1.45	1.35	0.4	脚3	先・右脚	
65	039-01	凹基 無葺瓦	SH8	F6-b	158	褐色土	180	128	106.74	A2-a	チャート	1.55	1.45	0.5	脚2	—	真鍮部埋、 石材積層
66	040-01	凹基 無葺瓦	SH8	F6-b	1142	褐色土	146	152	106.60	A1-a	チャート	1.45	1.50	0.5	脚2	先	先端中央欠 (1.6)
67	041-01	凹基 無葺瓦	SH8	F6-b	1358	褐色土	37	16	106.61	A4-a	チャート	1.30	1.20	0.4	脚2	先	先端大きく 欠(1.3)
68	042-01	凹基 無葺瓦	SH8	F6-d	233	褐色土	38	184	106.73	A2-b	チャート	1.50	1.45	0.4	脚4	—	先端大きく 欠(1.5)
69	043-01	凹基 無葺瓦	SH8	F6-d	684	褐色土	116	48	106.51	A4-b	チャート	1.72	1.22	0.5	脚4	右脚	
70	044-01	凹基 無葺瓦	SH8	F6-d	761	褐色土	35	89	106.62	A5-a	チャート	1.30	1.50	0.5	脚2	先・右脚	先端大きく 欠(1.4)
71	045-01	凹基 無葺瓦	SH8	G6-a	80	褐色土	24	172	106.51	A1-a	チャート	1.85	1.35	0.4	脚2	先・両脚	先端折れ
72	046-01	凹基 無葺瓦	SH10	F8-a	86	褐色土	61	130	106.83	A1-a	チャート	1.60	1.50	0.4	脚2	両脚	
73	047-01	凹基 無葺瓦	SH10	F8-a	76	褐色土	99	184	106.83	A1-b	チャート	1.30	1.45	0.5	脚3	左脚	小 上部は 新しい葺
74	048-01	凹基 無葺瓦	SH10	F8-a	97	褐色土	140	76	106.85	—	チャート	1.92	1.62	0.4	—	—	未製品初期
75	049-01	凹基 無葺瓦	SH24	E6-b	40	褐色土	134	108	106.72	A2-b	チャート	1.60	1.38	0.4	脚3	先・左脚	
76	050-01	凹基 無葺瓦	SH24	E6-b	88	褐色土	189	67	106.48	A1-b	チャート	1.55	1.22	0.4	脚3	—	
77	051-01	凹基 無葺瓦	SH24	F6-a	57	褐色土	123	23	106.76	A1-a	チャート	1.92	1.75	0.5	脚2	両脚	基部失敗 割離
78	052-01	凹基 無葺瓦	SH24	F6-a	244	褐色土	66	172	106.53	A2-b	チャート	1.95	1.52	0.4	脚2	両脚	
79	053-01	凸基 無葺瓦	SH24	F6-a	255	褐色土	180	92	106.60	A10	チャート	1.95	1.52	0.4	—	—	脚なし
80	054-01	凹基 無葺瓦	SH24	F6-a	895	褐色土	119	200	106.32	A1-a	チャート	1.62	1.65	0.5	脚2	—	
81	055-01	凹基 無葺瓦	SH24	F6-a	981	淡褐色土	171	196	106.29	A1-a	チャート	1.62	1.72	0.5	脚2	先	先端欠 (1.6)
82	056-01	凹基 無葺瓦	SH24	F6-c	152	褐色土	6	95	106.76	F3-a	チャート	1.50	1.65	0.5	脚3	先	
83	057-01	尖頭器	SH8	F6-d	80	褐色土	185	121	106.72	—	チャート	1.80	1.55	0.5	—	先	
84	058-01	尖頭器	SH24	F6-a	522	褐色土	130	18	106.49	—	チャート	2.50	1.97	0.9	—	完存	石鏝か
85	017-01	尖頭器	包含層	E9	—	茶褐色土	—	—	—	—	サマコイ	7.54	2.40	0.98	—	完存	
86	016-01	掻器	SH4	F4-d	311	褐色土	130	185	106.68	—	チャート	4.98	5.8	0.9	重22.48	完存	
87	014-01	楔形石器	SH4	F4-c	214	褐色土	132	145	106.55	—	チャート	1.72	1.65	0.7	重2.14	完存	両極
88	059-01	剥片	下層	B6-d	17	黄褐色土	133	140	105.90	—	頁岩	14.5	7.0	3.5	—	—	
89	060-01	剥片	下層	C6-c	14	黄褐色土	188	141	105.99	—	チャート	13.2	6.1	2.3	—	—	二次崩壊あ りか

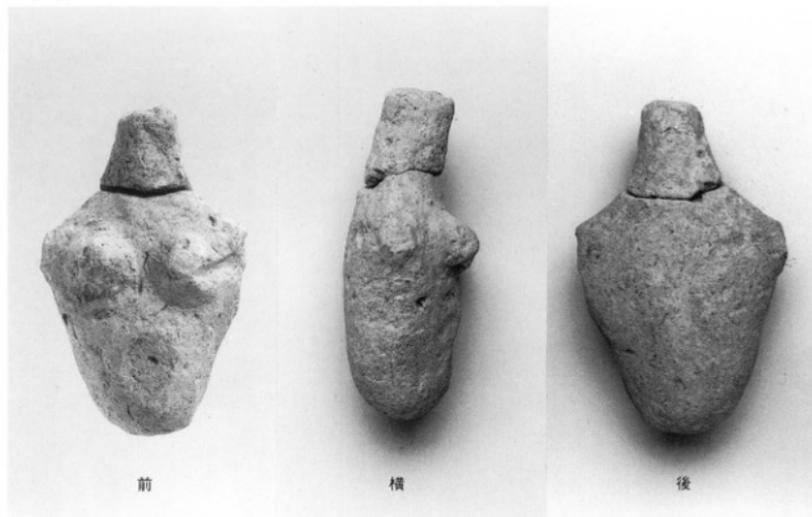
第5表 出土遺物観察表(3)



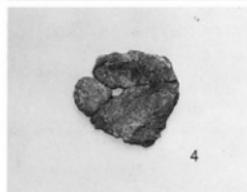
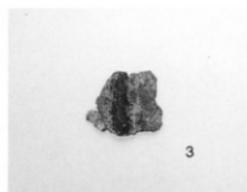
調査区全景



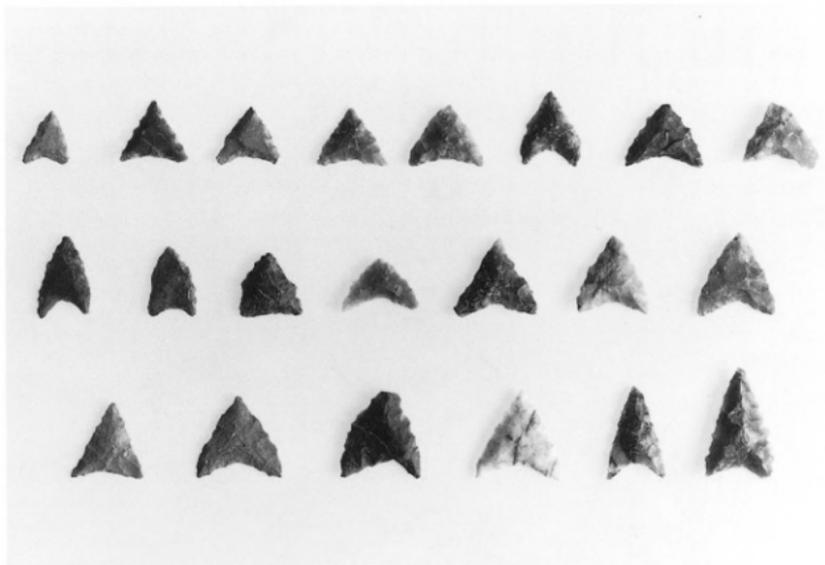
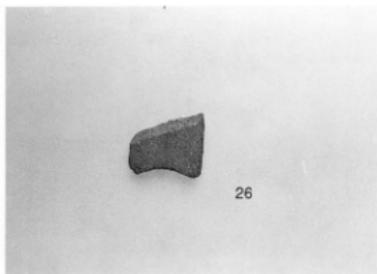
SH4 (左上) SH8 (右上) ・ SH24 (左下) ・ SH10 (右下)



土 偶 1



縄文土器 (左) と尖頭器 (右)



矢柄研摩器（上）と石鏃（下）

白紙

## 附編 粥見小林遺跡発掘調査報告

### 1 基本層序

調査区は、既述の粥見井尻遺跡と同様に柳田川が形成した低位段丘上に位置するが、飯南町では最も水田域が広がる一端にある。さらに詳しくみると、調査区の北方及び東方には1～3m下がる小さな谷状の低地が存在する。本調査区は、おそらくは低位段丘面形成時以降の侵食によって取り残された部分と推定できる。

基本層序は、第1層が灰暗褐色土（耕作土）、第2層は、厚さ1cm以下の薄い床土を含む暗褐色土（包含層）、第3層は黄褐色砂質土（地山）である。さらにその下の第4層は、灰オリブ色砂層が堆積している。遺構は第3層の上面で検出したが、第2層の包含層は調査区のほぼ北半に限られる。したがって、南半では包含層遺物もほとんど確認されなかった。また、調査区の大半は元々茶畑であったが、南半の西寄りには隣接地から続く庭木畑であった細長い三角形の部分があり、この部分は庭木の移植等のため、第4層に至るまで大きく攪乱されていた。

### 2 遺構

今回の調査によって検出した主な遺構は、中世の掘立柱建物4棟と溝3条、土坑2基である。他に近世の土坑1基、時期不明の土坑3基が認められた。

#### (1) 掘立柱建物

調査区の北半及び東壁付近で小穴が検出されたが、特に東壁付近に集中して検出していた。そのため、東壁部分を幅60cm程度東側へ拡張したところ、さらに柱穴が存在した。この結果、重複する計4棟の建物を確認した。いずれも建物の一部分であり、建物はさらに東側調査区外に続くものと考えられる。出土遺物がわずかであり、詳細な時期は不明である。

SD10 後述のSD4をまたぐように並ぶ。規模は4間(7.4m)×1間(1.8m)以上の建物である。Pit3はSD4に切られる。柱間は約6尺(1.8m)等間である。建物の大半が調査区外となるために棟方向は不明だが、柱列の方向から仮定するとN30°Wである。柱穴の直径は0.5m前後、深さは0.4m前後

ある。柱痕跡が認められたもので、柱の推定径は0.15mである。ここから土師器の鍋の小片が少量出土した。詳細な時期は不明である。

SB11 SB10と同様にSD4をまたぎ、西側側柱列3間(5.4m)を確認した。さらに南に延長する可能性が高い。Pit4はSD4に切られ、柱間は6尺(1.8m)である。棟方向はN37°Wである。柱穴の直径は0.4mほどである。深さは0.5mを測る。出土遺物は確認できなかった。

SB12 SD4の南側に位置し、西側側柱列3間(5.8m)を検出した。柱間はおよそ6尺5寸(1.95m)、柱列の方向はN25°Wである。柱穴は直径0.3m、深さは0.3mと小規模である。根石を含む柱穴も確認した。遺物は確認できなかった。

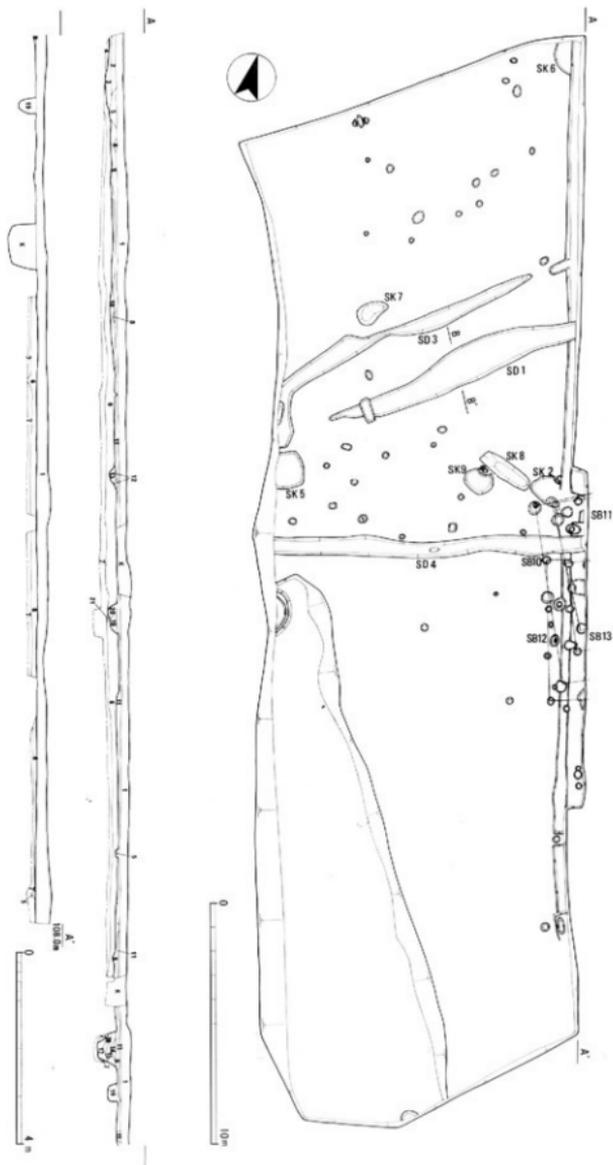
SB13 SB12と同様、SD4の南側に位置し、西側側柱列2間(3.6m)を検出した。柱間は6尺(1.8m)、棟方向はN30°Wである。柱穴は直径0.4mで、深さは0.4mを測る。遺物は確認できなかった。

#### (2) 溝

今回の調査では3条を確認した。方向や形状から2種類に分類できる。

SD1 調査区の北半を南西から北東に向かって延びる。中央での最大幅は1.3mに及ぶ。深さは0.6mである。方向はN42°Eを示している。東側の調査区外へ続く遺構であろうが、西端は消滅している。断面は逆台形状である。埋土は、暗褐色粘質土に黄褐色ブロックや炭化物が混入する。下部では砂質土に変化している。遺構の中央付近から常滑焼壺(10)が出土した。土師器の鍋や皿・天目茶碗も含まれていた。時間的には16世紀中頃の遺構であると思われる。

SD3 SD1の北側、約2mの距離を隔てて並行する遺構である。東側で浅く、一部は検出面で消滅しているが、ほぼ調査区を西から東まで貫いている。幅は0.8m、深さは0.3mである。断面は底部でやや丸い逆台形状を呈する。埋土はSD1と同様で



第19図 遺跡平面図 (1 : 200)

1. 灰褐色土 (層状)
2. 灰褐色土 (灰褐色土・アロワ・灰行状)
3. 灰褐色土 (灰褐色土・灰土・灰土)
4. 灰褐色土 (2層)
5. 灰褐色土 (灰褐色土・アロワ)
6. 灰褐色土 (灰褐色土)
7. 灰褐色土
8. 灰褐色土 (アロワ)

9. 灰褐色土 (灰褐色土)
10. 灰褐色土 (アロワ)
11. 灰褐色土 (灰褐色)
12. 灰褐色土 (灰褐色)
13. 灰褐色土 (灰褐色)
14. 灰褐色土 (灰褐色)
15. 灰褐色土 (灰褐色)
16. 灰褐色土

17. 灰褐色土 (灰褐色)
18. 灰褐色土 (灰褐色)
19. 灰褐色土 (灰褐色)
20. 灰褐色土 (灰褐色)
21. 灰褐色土 (灰褐色)

K. 概況

第18図 土層断面図 (1 : 100)

ある。ここから土師器鍋(12)が出土した。16世紀中頃の所産と考えられる。

**SD 4** 調査区のはほぼ中央を東西に走る遺構である。方向はN65°Eを示す。幅0.9m、深さ0.5mを測る。東はど下がっているため、西から東へ流れる遺構であるとみられる。断面はやや船底状の逆台形状で、底部に鉄分の沈着がみられた。中央付近で長さ0.4m、幅0.2m、厚さ0.2mの自然石が溝方向にあわせて置かれてあった。これは溝を渡るために使用されたと考えられる。埋土は炭化物を含む黒褐色土である。土師器鍋、皿が出土しており、期的には16世紀前半頃の遺構であるとみられる。

### (3) 土 坑

**SK 2** 調査区中央付近のやや東側で検出した。長径3m、短径1.3mで、深さは0.2mを測り、平面形状は楕円形である。ただ東端は防霜ファンの基礎埋設により擾乱を受けているため、全体規模は不明である。土師器鍋が認められたが、小片で用途も不明である。

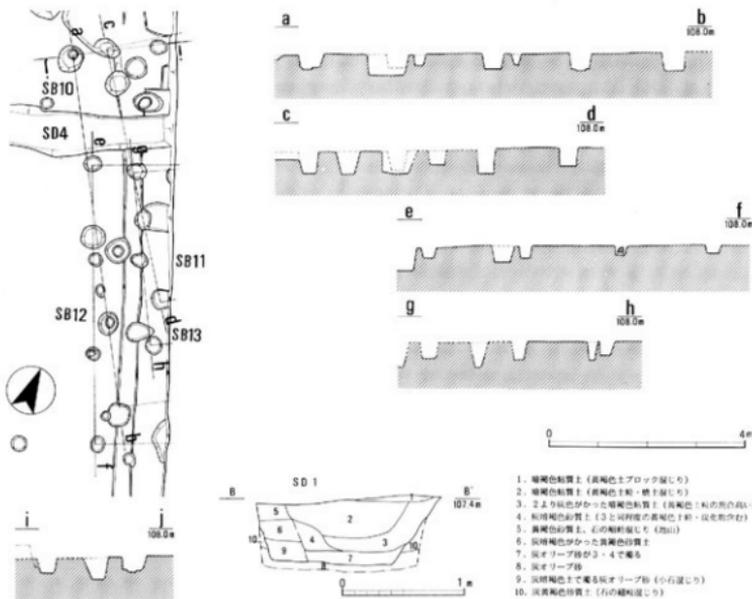
**SK 5** 調査区中央部の西側で検出した。一辺が1.4mで、平面形は隅丸方形である。深さは0.3mを測る。中世の土師器が出土した。廃棄土坑であろうが、詳細な用途は不明である。

**SK 6** 調査区の北東隅で検出した。平面は不定形で、深さは0.2mである。底部から陶器摺鉢(13)が出土した。期的には19世紀初頭頃の所産であろう。

**SK 7** SD 3の北側で検出した。長軸1m、短軸0.6mの三角形を呈し、深さは0.3mを測る。出土遺物は確認していないので期的には不明であるが、埋土の堆積状況からSK5と並行するものと考えられる。

**SK 8** SK 2の西側で検出した。長さ2.6m、幅0.6m、平面形は長方形である。深さは0.5mである。

**SK 9** SK 8の南側で検出した。直径1m、深さ0.2mで、平面形は円形である。無遺物であり、用途は不明であるが、おそらくSK 7前後の所産であろう。



第20図 SB10~13平面図・断面図(1:100)・SD1土層断面図(1:40)

### 3 遺物

当遺跡からの出土遺物はコンテナ5箱分である。中世の土師器や陶器が主要遺物である。中世の遺物から順に報告する。

#### (1) SD1・SD3 出土遺物 (中世)

**土師器小皿** 1～4はいずれもSD1から出土した。口径は9cm程度で器厚は薄い。伊藤裕偉氏の分類による南伊勢系土師器の小皿で、4はB系統、他は口縁部にヨコナダが施される、D系統に属するものである。時期は16世紀前半のものと思われる。

**土師器鍋** 5～7はSD1から、12はSD3から出土した。口径は30cmである。いずれも口縁端部は内側に折り返し後、つまみあげられ、外側に面を有する。口縁全体にはヨコナダが施されている。端部の立ちあがりは5・6に強調されている。12は伊藤氏編年の第4段階d型式、他がc型式に相当するものと思われる。

**土師器蓋 (茶釜)** 8もSD1から出土した。口径は15cm程で、体部は直線的に立ちあがり、口縁部でやや屈曲し、端部は水平気味に開く。内外面ともにナダが施されている。本来はつまみが中央に装着されるが、欠落している。

**陶器甕** 9はSD1から出土した。口径は54cmの大型品である。口縁部はN字状に折り曲げられて密着し、端部は回転ナダによって仕上げられている。常滑産で、赤羽・中野氏編年の10型式に相当し、15世紀後半頃のものと考えられる。次の10は9と同一個体と思われる。押印文が認められた。津市の安濃津遺跡群から出土した甕にも同範のものがあり、同じ窯で焼かれた可能性が高い。11は9と比較すると口縁部の折り返しの度合いは小さいが、端部は外側へ強く引き出され、仕上げも丁寧である。外面には自然釉が認められる。赤羽・中野氏編年の10型式に相当し、15世紀後半に該当する。

#### (2) SK6 出土遺物 (近世)

**陶器溜鉢** 13は口径36cmで、内外面ともに回転ナダで調整され、内面には縦方向のクシメが認められる。内外面とも鉄釉が施される。瀬戸産である。藤澤氏の編年の19世紀初頭頃の所産であると思われる。

#### (3) Pit 出土遺物

**土師器鍋** 14～15は伊藤氏編年の南伊勢系鍋である。残存率は低いものの時期的には、14が4段階a型式、15はb型式に相当する。

**土師器焙烙** 16の口径は37cmの大型品である。口縁部は屈曲して開き、端部は上方に立ちあがる。17～18世紀頃のものである。

#### (4) 表採・包含層出土遺物

**石器** 17は凹基無茎石鏃で、側縁部はやや膨らみのある直線形である。長さ1.6cm、幅1.4cm、厚さ0.4cmで、重さは2gを測る。同形状のものが粥見井尻遺跡からも出土している。18は不定形な剥片で材質はサメカイトである。調査区東側の拡張区の包含層から出土した。側縁の中ほどに二次調整が認められる。長さ5.2cm、幅3.0cm、厚さ0.7cmで、重さは3.2gである。19は18と同様の剥片で、中央付近の黄褐色土から出土した。長さ4.3cm、幅3.3cm、厚さ1.1cmで、重さは2.3gを測る。側縁の一部に使用痕が認められる。

#### 4 結語

縄文時代の遺物は包含層中で確認した石器のみで遺構出土のものは皆無であった。粥見井尻遺跡では多量の石器や住居跡が検出されているので、むしろ、居住地としては空白となる場所であろう。

今回確認した主な遺構はおもに掘立柱建物であった。

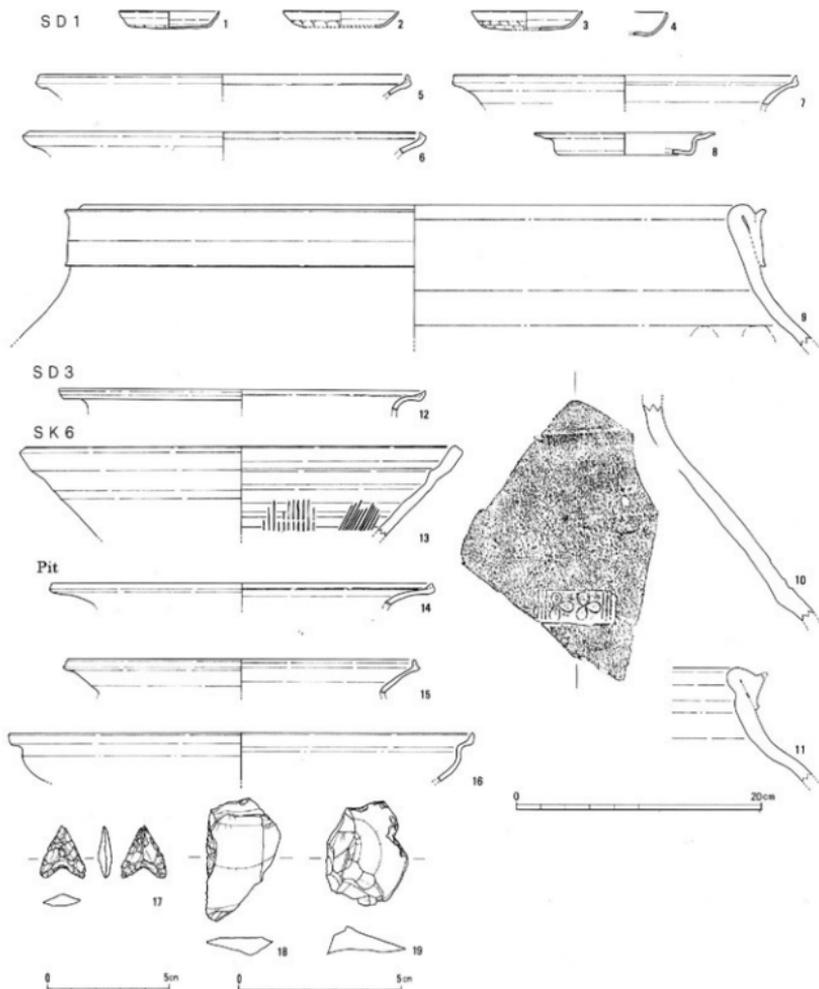
調査区の制約のため、建物群の全体のあり方を検討するには至らなかったが、現在の集落よりはかなり東の段丘下にまで及んでいたことがわかった。詳細にみることにする。

SD4と掘立柱建物群は重複ないしは近接するように建てられていて、その位置から時期的なものを考えたい。まず、SB10とSB11は建てかえられながら立地する時期があり、それらの廃絶後にSD4が掘られたと考えられる。さらにSB12・13が建てかえられながら立地する時期があったと推察される。建物のおもな大半が東側の調査区外に広がっており、また出土遺物も少量であるため、確かな生活実態を把握するまでは至っていない。

溝については、SD1と3は幅・深さは違うが、並行して流れていることや遺物年代の一致から、関

連のある遺構と考えられる。また、調査区北辺の崖（畦畔）の方向と一致し、旧地籍図の境界線とも直交することに注目しておきたい。15～16世紀頃の当地域の情勢は、長らく多気（現美杉村）を本拠地とする北畠氏の勢力が波及していた。戦乱の相次ぐな

かで、比較的安定した地域であったと思われる。当地は、川俣街道と伊勢本街道とが交差する要衝でもあることも考えると、上記の建物の建て替えの状況や溝の掘削等の営みがあったことは確認できたのである。（前川明男）



第21図 出土遺物実測図(6) (17は2:3、18・19は1:2、他は1:4)



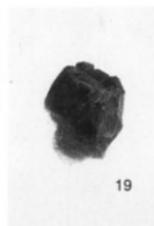
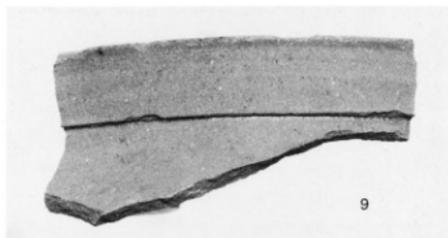
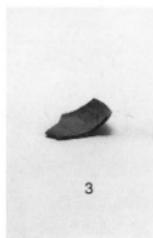
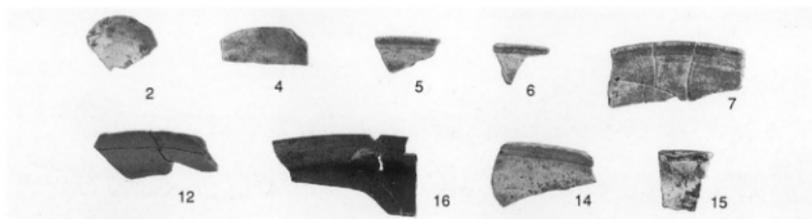
調査区全景 (北から)



SB11~13 (北から)



SD 1 (東から)



出土遺物

報告書抄録

ふりがな	かのみ いじり いせきほくつちようさほうこく							
書名	粥見井尻遺跡発掘調査報告							
副書名	附編 粥見小林遺跡発掘調査報告							
巻次								
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	156							
編集者名	中川 明・前川明男							
編集機関	三重県埋蔵文化財センター							
所在地	〒515-0325 三重県多気郡明和町竹川503番地 TEL 0596-52-1732							
発行年月日	西暦 1997年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
かのみ いじり いせき 粥見井尻遺跡	みえけんいんなんぐんいんなんち 三重県飯南郡飯南町 かのみいじり 粥見字井尻	24421	52	34度 36分 07秒	136度 24分 05秒	19960507 \n 119961121	1,950	平成8年度 国道368号 国補道路特殊 改良工事にか かる本調査
かのみこぼやし いせき 粥見小林遺跡	みえけんいんなんぐんいんなんち 三重県飯南郡飯南町 かのみこぼやし 粥見字小林	24421	51	34度 27分 04秒	136度 24分 08秒	19961008 \n 19961121	600	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
粥見井尻遺跡	集落跡	縄文時代 草創期  室町～江戸時代	竪穴住居 土坑  掘立柱建物	土偶・細隆線文・爪形 文・無文・条痕施文・ 押圧縄文瓦痕土器  矢柄研磨器・有舌尖頭 器・石鏝・削器・フレ イク・石皿・母岩 土師器		草創期の竪穴住居4棟と 土偶2点 草創期以前の石材採集跡		
粥見小林遺跡	集落跡	室町時代	掘立柱建物 溝	土師器皿・鍋 常滑焼甕 瀬戸揃鉢				

---

三重県埋蔵文化財調査報告 156

三重県飯南郡飯南町

**粥見井尻遺跡発掘調査報告**

附編 粥見小林遺跡発掘調査報告

1997年3月

編集・発行 三重県埋蔵文化財センター

印刷者 東海印刷株式会社

---